明治三十一年五月二十四日發兌

女鑑

第百五十七號

東京國光社

女鑑第百五拾七號

目錄

中村栗園の母



家庭の和樂

女子は、家庭の支配者なり。家庭をして和氣融々たらしむるも、はた寂寞乾燥たらしむるも、一に妻たる者の覺悟如何に在り。琴瑟相和し、老親兒女、相共にむつみあひて、絶えて風波の起るなし。家庭の理想は、實に此の如くに過ぎず。家庭にして此の如くならんか、父母は心ゆたかに老後を樂しむを得べし。夫たる者は、出でゝ社會に辛苦するも、歸りては之が爲に大なる慰籍を得て、一日の勞を忘れ、新に活潑に働くを得べし。兒女も、之に化せられて、心のびやかに、こせつかず、尤も完全に、又尤も圓滿に生長し、發達するを得べし。

されば、一家和樂なるは、啻に一家の幸福なるのみならず、現に社會に盡せる夫をして、十分に其力と氣とをのばさしむべく、又第二の國民たる兒女をして、完

全に發達せしむるを得べし。而して家庭をして此の如くならしむるは、妻たるものゝ家政の如何に由る。女子の任も、亦大ならずや。

家庭の和樂、これ言ひ易くして、而かも眞に和樂なる者少きは、何ぞや。往々姑と嫁となかわろく、夫と妻と相和せず、風波起り、くぜつ絶ゑず、一家何となく、乾燥無味となりて、面白からず。爲に父母は、常に眉をひそめ、夫は家に歸りて一日の勞苦を慰するに由なく、内を外に出歩き、甚しきに至りては、言語に絶ゑたる惡所に狂ひ、兒女たる者も、隨て完全圓滿なる發達を遂ぐるに由なく、ひがみまがりて、よろづ陰氣を帶ぶるに至る。此の如きは、家庭を司る妻の不心得に基く。而して啻に一家の不幸を來たすのみならず、社會に影響する所も少しとせず。女子の責も亦重からずや。

路を歩する男子の、顔に愉快なる色なくして、憂を帶ぶるもの、比々皆然るを見よ。此の如き男子、豈に活潑に社會に盡くすを得んや。かく男子の面白さうな顔付をせざるは、これ其の家の面白からざるに由るもの多し。一家面白からずして、

社會も亦自ら面白からざるに至る。

吾人をして言はしめば、今の日本の家庭の缺點は、靄々たる和氣なきに在り。これもとより必ずしも女子の罪のみに歸すべきにあらず、男子も罪あり、社會も罪あり、今の風俗習慣も罪あり。されど、家庭の支配者たる女子、尤も其の責に任ぜざるべからず。苟くも妻女にして、親に事ふるの道を解し、夫に事ふるの道を解し、子を養ふの道を解せば、家庭は、此の如く落莫枯燥ならざるべきなり。女子はつけあがるものなりとて、夫はわざと嚴格をよそほひ、しかつめらしき顔をなし、些の和氣なく、家庭をして寂莫ならしむ、これ男子の罪なり。而して男子をして此に至らしむるもの、女子亦罪なしとせず。樂んで淫せず、親しうして禮を失はず、歡笑の聲あると共に、禮義秩然たらば、夫たるもの、何を苦んでかわざと嚴格をよそほはんや。今の妻たるものは、夫と休戚を共にせず、夫の喜憂を分たず、又夫を慰籍するの道を解せず。眞に夫婦たるの意義に於て缺くる所あり。爲に家庭冷かにして面白からず。婦はたゞ箕箒を執るのみにして、夫の話相手た

るに足らず、家庭の和樂もとより望みうべからざるなり。夫學問あるものは、妻も多少學問なかるべからず、夫が執る事業の何たるかを解し、之に同情を表するに至るだけの知識なかるべからず。憂を共にし、喜を共にし、毫も家事を以て夫の心を亂らしめず、よく親に事へ、よく子を養育し、家政を一身に統括す。これを完全なる妻といふ。而して殊に力むべきは、家庭に和氣を生ぜしむる事也。家庭に和氣を生ぜしめむには、妻たるもの、陰氣なるべからず、快活ならざるべからず、高尚なる音樂も之が媒たるべく、面白き話柄も之が助をなすべし。かくして、親は喜び、夫も快樂を一家の外に求むるを要せず、兒女は家庭を此上なき樂土と思ひ、精神常に愉快なり。家庭の理想また之に過ぐるものあらんや。嗚呼家庭の和氣なる哉、家庭の和樂は、よく完全圓滿なる大國民を生み出すもの也。



論説

小兒と母親と（續）

高嶋平三郎

世に名ある人が、賢き母の教育によりて人となりし話は、此外のべますれど、數限りもなく澤山ありませうが、今はこれ丈にいたしておきます。して何故私が此やうに和漢西洋の例を引いてお話するかといふに、これは只、母親の感化が子に及んだといふことの證據ばかりではない、婦人の勢力がどれ程つよく此世の中にひゞくものであるか、婦人の眞の名譽といふものは何である歟といふ事をお話する爲であります。皆樣試に御考へになればすぐ分りませう、程子、ヘルバルト、若くは孟子、小楠公、などの言行が、今日只今まで私共の心の中に深く染みこんで、いはゞ、私共の心は、是等の多くの聖賢の人達の心に支配されて居るといふてもよろしい程でありますが、かゝる聖人賢人の心は誰から出たかといへど、母の心が其中心となつたといふことは、前にも申す通り、間違ひない事であります。左すれど、婦人といふものは、自分で說を

立てず、發明せず、武功を現はしませんが、是等のことをする心の本を作る人であります。そして、自分は謙遜に、却りて世間からは、其子孫ばかりがもてはやされて居る次第であります、實に私は婦人は無名の英雄であると思ひます。此事に就いては、婦人と教育者とはよく似て居ります。教育者は、即婦人のそだてた子供を、その婦人に代り、又は婦人に次いで教育するものでありますれど、全く同じ役目を以て居ります。教育者も亦無名の英雄であります。世に名のある英雄は、決して獨りで仕事をしたのではない、全く此無名の英雄――婦人及教育者――のかげでいろ／＼の功名を遂げたのであります。昔、孔子様も、人不知而不慍不亦君子乎哉と申されて居ります。天下國家の爲に大功勞を立てゝも人にはめられず、金鵄勳章も貰はず、それでも甘じて自分の本分を盡すものは、廣い世の中に、婦人と教育者との外多くはありますまい。皆様は此尊き仕事をお執りなさる方々でありますれど、一圖に、自分の身の輕くない事は御注意あつて、子供の教育といふことに深く心をよせられんことを希望いたします。お話がだん／＼長くなりましたが、是からいよ／＼、子供の心のひらける有様に就いてお話いたしませう、此お話をいたしますと、ます／＼皆様の責の重く大きい事がよく分ります。

偖御承知の通り、人の身體には、たべ物を消化す仕掛け、手足や身體を動かす仕掛、血のめぐる仕掛、呼吸をする仕掛、物事をわきまへ知る仕掛など、澤山の仕掛がありまして、何れも大切な仕掛でムりますが、その中でも、人の心のはたらきの出來まする仕掛は、最後に申しました物事をわきまへ知る仕掛、即神經系統と申して、白き銀色をした少さなすぢと、灰白のつぶ〳〵とのつながりが身體中に行き渡つて居りまして、此物が、頭の中と、脊骨の中とには、特に大きくかたまつて居ります。私共が、見たり聞たり食べたり嗅いだりいたしまする時には、其細かいすぢから頭へ傳はりまして、其頭の中で始めて心のはたらきとなつて、之は花である鳥であるといふやうに、物事が分るのでムりまする、所が小供の生れたてには、此神經系統が誠に柔かで、物事に感じ易く、又消えやすく、容易に頭に行つて心のはたらきとなつて、物事を辨別することは出來ませぬ、一體人が物事を辨別いたしまするのは、前に知つて居りまする事と、今見たり聞たりいたしまする事とをくらべて見て、一つものなら分るし、まるで違つて居りますれば決して分るものではありません、大學者が大そうむつかしい事を知りますのも子供が蟬やとんぼを知りますのも、皆同じ事で、只前に覺えて居る事と、今日の前の事とをひとつにむすびつける丈のことであります。そうしますれば、子供

が物事を知る一もん最初には、何か一しよになる種子がなければなりません。丁度こんぺいとうをこしらへまするにも、けしつぶを種子にして、だん〱砂糖をつけて行くのと同じことであります、人の心の此種子を作るものは誰かと申しますれば、即ち母親であります、前に申ました通り、子供は生れぬ前から神經系統といふものを具へて居りますれば、生れると間もなく、日の光りは眼から、乳のあぢは口から、風の寒さは膚から、物の臭は鼻から、それ〲例の神經のすぢを傳ふて、頭の中の腦へ參ります、これが毎日〱、同じ樣に、同じ處から同じ頭の中へ參りまする故、いつとなく心のはたらきを起す種子となります。そうして、此種子の中に、一もん多くはいつて居るものは何かといふと、母であります、母の顏形、母の聲音、母の臭、母の乳の味、母の膚ざはり、いひかへますれば、子供が物を知る戸口から、一もん最初に一もん多くはいりまするものは母であります。そして、此母は、日に何べん何十ぺんといふことなく、子供にはいります故、之が一年たち、二年たち、三年四年となる間には、どうしても消えぬ程のしるしを子供のやはらかい頭の中へ殘します。此印こそ、のち〱子供が大學者ともなり、大政事家ともなり、大發明家ともなる尊とい種子であります。されども、又此種子は、よい事ばかりの種子ではありませぬ、大馬鹿、大不孝、大盜

賊、人殺となる種子も之よりであります。

右に申しましたる事が、人の心のそも〳〵はじめの種子で、これから子供が匍い歩行くやうになり、又立ちて歩行くやうになり、言語が分るやうになりますれど、母の顔容、物いひ、擧動ばかりではありませぬ、まはりに在る人々、おもちや、山川のありさま、鳥獸など、何にても、五官にさはるありとあらゆるものが、子供の心の中にはいり、前の種子にかたまりついて、だん〳〵大きなこんぺいとうのやうになつて、是から、よい量見もあしき量見も出るやうになるのであります。さすれば、子供の心、いや子供ばかりではない、すべて人間の心といふものは、自分では知らずに居ても、皆自分の身のまはりの、ありとあらゆる物から開けて出來たものでムりまする故、子供の心は、母親を初とし、家内の人々、おもちや、犬、猫、雀などの如く、ほんの近まはりの物事であるといふてよろしいと思ひます。此事を考へて見ますれば、隣近所の有樣や、朋友や、又親兄弟の言ふ事や、する事を愼まねばならぬといふ事は、おそろしい程深く心に感ずる次第でムりまする、昔、孟子の母が、三たび家を移して、隣をゑらんだといふは、其意味がます〳〵深くなるのであります。又初めにお話いたしましたゲーテといふ獨乙の詩人は、子供の時、最初につむりにはいつた事はどんなゑら

い人でも、之を平げることは出來ぬといふたさうで御坐ります。又私が只今までお話いたしました、人の心のひらけて行く次第は、前に申したヘルバルトといふ先生が深くしらべて申しました事で、學校でいろ／＼の事を教へまするのも、つゞまり此種子をよいものばかりのかたまりにして、だん／＼大きいものとして遂に、わるい事はせうにも種がないといふやうな人を造るのが目的でムりまする。又之と前にお話いたしました程子のいはれまするには、人がわるい事をしたりいろ／＼の慾に迷ふは、丁度虚の茶碗へ水を入れるやうなものじや、若し茶碗に水が一ぱいはいつて居つたら、外のものはいらぬ、人もはじめによい事を以て心を充たしてさへ置けば、わるい事は決して入らぬと申されました。之も丁度今のヘルバルトのいはれた事と同じで、つまり立派な心の種子を心の中へ入れておかねばならぬ事でありませう、又前のペスタロッチは、すべて教育は心のいしづゑとなるべき物事をしへ、之を本として、萬の事をさとらすやうにすべきことを深く信じ、之に就きても母親の心得の大切なることをさとり、世の母親の爲に色々有益な本をこしらへました、此中の一冊の本が時の獨乙の皇后のお目にふれ、皇后も深く感じられて、ます／＼教育の大切なることをお覺りになりましたほどでムりますれど、下々の人も、是等の本と、ペスタロッチの熱心なる

行ひにはげまされ、いよ〳〵教育に力を盡すやうになりましたれど、獨乙の國は、遂に、今日世界に並び少なき强國で、しかも學問の盛んな國となりました、是は一に教育のためであると申すことでありますが、其本を尋ぬれど、ペスタロッチの功が多くムいまして、又其本をたゞせどやさしき母と乳母のバルバラとが其根源であります。おもへど思ふほど、婦人の力は大きいもので、又おそろしいものではありませぬか。

右長々と申し述べました所で、小兒といふものは、其初身心とも、殆全く母の感化によりて生長するものである、身体の弱い母には弱い子が生れ、强い母には强い子が出來るといふ事、幷に子供の心は、母といふ形色聲音味臭膚どかゞを種として發育つといふこと、幷にその種子は善き事のみならず、惡しき事も同じくかたまりて、大きな種子となるものなること等を、大略お話いたしました、就ては、其種子即子供の心の本を作るには、如何なる心得を以てして善きかといふことは、此次にくる疑問でムりまするが、餘り長くなりましたから、それは又の機會にお話する事にいたしませう。

（をはり）

最も嫌ふべきもの

坂本三七郎

一襲の東コート、價廉なるにあらず。而して、家々の女流、爭ひて之を求め、唯人に遅れざらんことを恐る。衣て以て、街道を逍遙し、以て人に誇り、友に示す。吾人は、甚だ之を嫌ひ、之を退く、茶人僧侶の十徳なる者に類する觀あるを如何せん。其の女子の品位を卑下ならしむること幾何ぞや。然るを、母に求め、兄に乞ひて、以て世に衒ふ、其の人既に然り、其の心事もまた察すべきのみ。愛孃の箇中、東コート十襲あらんよりは、机上數卷の女敎書あるに如かず。流行、又流行、都下漸く奢靡の風盛に、衣裝の流行に至りては、變化朝夕を待たず。況んや、流行なるもの、日に淫猥者流を摸する至る。女流の求に從はゞ、日も亦足らず。世の父兄たる者、豈萬金を貯ふる者のみならんや。又流行の衣を裝ふもの、何ぞ皆千金の孃のみならんや。吾人之を聞く、流行なる者は、多く花柳、或は梨園社會に基くと、而して、花柳梨園の如き、多くは、淫靡客を衒ふもの、所謂女は己を喜ぶ者の爲に容くるを唯一の業とするものなり。之が爲に、客を蕩し、世に衒ふ事に至りては、何ぞ至らざる所あらんや。然るを、世の孃等にして、之を學ぶ。學を修めて、儼然家庭の母たらんとするもの、其の流行の衣裝、冶態に於て、却て卑むべき花柳狹斜の妓流に比せんとするに至りては、吾人筆を

極めて、責めざるべからず。然れども、吾人は、屢々女鑑に於て、論じたりき。吾人は、女子が衣を飾り、貌を美にするは、決して之を咎めずして、之を賛する者なり。女子の美を欲するは、天性なり。女性は春の如し。櫻桃杏李は、天地の春を和す、美を好むは、人世一般の美と云ふべし。然れども、只其の美たる、品位の高尚ならんを欲し、艶粧奢靡、妓女娼婦の流行を習はざらんことを欲する者なり。吾人は、端衣正服を欲す。此の如き、女子を呼んで、庭家の良母賢妻と云はんとするなり。吾人が今日に於て、最も嫌へる一は流行の奴隷たるにあり。

女性の天に得たるは、順柔にあり。従て、其の容貌言行一切の事は、皆順柔ならざるべからず、吾人が最も女子の言行に就て、嫌ふものは、漢語を以て、人に接するにあり。就中束髪漢語は、最も嫌ふものなり。況んや不學なる婦女子、客に對して、喋々漢語を話し、得々たる者に至りては、吾人其の面に唾せんとす。男子と雖も、己れの富に誇り、貴に誇り、或は學に誇るは、悪むべし。女子にして、學を挾んで、漢語以て人に接す。順柔の美なく、世俗の所謂愛嬌なるもの消し去て、女子圓滿の和なし。吾人は、女子の書簡に接して、拜啓頓首再拜等の文字あるも、尚其の人の順柔の女性を欠くを疑ふ。況んや、漢語を對話中に喋々するをや。吾人近日、街頭多く東コートの

流行を見、併せて、婦女子の漢語を話すを聞き、吾人が最も嫌ふもの丶二を表出して諸嬢を戒む。

女徳のしをり（六）

三輪田眞佐子

これと異なりて、有徳の人は、獨り人たる本領を全うするのみならず、最も幸福を得る道を知るものなりと信ずるなり。今その然る所以を明にせんため、修徳に伴ふべき二三の幸福につきて左にものせん。

第一天下に敵なし　論語に、徳は孤ならず、必ず隣あり。と教へられぬ。信に女徳の盛なる女子あらんか、さながら衆星の北辰に向ふが如く、一家一族の人々は更なり、天下の人々も之を仰ぎ、將た愛するに至るべし。されど、富まんもこれを惡むものなく、貧しからんもこれを侮るものなく、つねに心廣く、体ゆたかなる境涯を送るを得ん。何の幸福かこれに若かん。徳なくして權威ある地位を占むるものは、人を服從せしむることあるも、その心を收攬することは能はざるべし。蓋、表面上は服從を裝はんも、その胸中を探らば、あるは輕蔑し、あるは憤慨せんのみ。故に、一朝變ずれば忽ち仇敵となるは、すなはち、手

を飜へせむ雲となり、手を覆へせむ雨となるに等し。などかその服從を恃むもの、枕を高くするを得ん。されど、德あるものは、たとひ、財なく、位なく、將た藝を知らざるとも、爲めに涙を注ぐものもあり、來りて風を慕ふものもあらん、桃李言いはされども、その下おのづから徑をなすとかや。兎に角、德あるものに人望は集るべし。況んや、身はその位に居り、德これに適はんか、天下の人は、赤子の慈母をしたふ如く思はん、などかこれに敵するもの起らん。

第二子孫の行末

源氏物語の若紫の卷に於て、尼君が孫なる紫の上が無我に過ぐるを患ひ、戒さめけらく、失せにける汝の母君は十二歳にて、父君按察大納言に後れ給ひしほど、いみじう物は思ひ知り給へりしぞかし。たゞ今おのれ見捨て奉らむ、いかで世にはおはせんとすらんとていみじう泣きて（おひたゝんありかも知らぬ若艸をおくらす露ぞ消えんそらなき）と歎きける情態をうつしけり。そは式部が女心を以て人情を描きたるものなれど、單に棄つべからず。

やけ野のきゞす夜の鶴だに子を思ひて鳴くとかや。宜なり、人は子を思ふ暗路に惑ひぬるとは。古人が、子孫のために美田を買はずと言ひけるも、彼等に怠惰放逸の不幸を享けしめじと思ふ情の切なるに出づるものなりけん。實に子孫のため百年の大計を

策せんとならば、父母たるものは、徳を修めて、子孫が立脚の地を定むべし。果して祖先の餘徳を蒙る子孫は、必ず到る所に歡迎せらるべし。されど、惡人の後裔なりと聞かば、誰かこれにくみするものあらん。且、富める家の子孫は放蕩に流るゝ例多からんも、徳ある家の子孫は挺身勤勉の傾きあるめり。これ、財は人をして奢らしめ、徳は人をして愼ましむる自然の餘影に伴ふ結果ならんかし。されど、眞に子孫を思ふものは、先づ徳を積むことを忘るべからず。

第三未來のほまれ　鳥獸は一時の情欲を逞しくするを以て目的とするめるも、人類は死せんも不義のために志を曲げざるなど、高尚なる特性あり。從ひて、身は朝露の如くはかなきものにもせよ、亦紅顏の少年もいつしか白骨と化するものにもせよ、玉の緒の絕ゆる瞬間までも、敢て正道を蹈む所以のものは、人分を信ずるに由るのみならず、亦死する曉に於て、他より擯斥せられ、あるは醜体を他に見せしめじとの名譽心あるに由るめり。

凡そ徒らに聞達を望むは、君子の耻づることなれど、善を行はんとの名譽心は最も賞すべきなり。如何となれば、人が生命の存する間のみを慮りて、その行を果すときは、未來の惡名をも恐れざるのみならず、單に人の希望は、つかの木のつかのまとなるべ

し。これに反して、芳名を竹帛に垂れ、徳音を千歳に傳へんとの徳心一たび起らば、人生の心事は、山鳥の尾の長き思ひこそすれ。されど、物質的に傾く人は、かゝる樂しき精神の味を知らざるべし。

第四生存に必要なり　女徳は、上に述べつる如き生存に、間接にのみ必要ありとな思ひそ。更に女子の生存上欠ぐべからざるものは、亦女徳ぞかし。そも〳〵女子は、その体制男子よりも纖弱なれど、女徳の光を以て、身の清淨を汚されざるやうつとむべし。人は、自ら侮りて後ちに人これを侮るとかや。故に、女子自らに徳操なからんか、他より犯さるゝ緒とならん。なほ、女子の主務たる家政なども、女徳なきときは全うすること能はざるべし。交際も亦然り。その他、女事はをさ〳〵然らざるはなし。

以上にて女徳の總論を総りぬ。以下その各論につきてものせん。

遠近の野邊の道芝ふみわけて言の葉くさをつみやかさねん



史談

中村栗園の母

鹽井ふく子

婦人はもと男子と性質殊なれど、自ら大偉業をたて丶世を稗益せんなどしては、中々に社會の凶禍を生ずべし。されど婦人は異變なくど、たゞ良妻賢母となり、よく兒童を訓諭敎導し、孟子の如く、ナポレオンの如く、正行の如き。子孫をいだして以て世を稗益せしめんこそ尤もの本意なれ。近きむかしの鴻儒と聞えたる中村栗園の母は、人となり溫順篤實にして、よく學を好み、書をよみ、智あきらかにして、賢母の聞え高かりけるが、栗園其むかし幼かりしとき、學を好まず、遊戲にのみ心を奪はれ、あづさ弓またかへらぬ春を、たゞ花にあこがれ、鶯にさそはれ、霞と共に山野に日をくらし、秋の月、やがてふけゆく世をも知らで、たゞきり〴〵す、松虫、轡虫、鈴虫とふりはへては彼方の叢に夜をふかし、此方の野にあこがれあかし、さては、つもり行く年のくれ、雪も螢もたゞいたづらに遊戲にあつめつむのみにて、同藩士の諸生諸子

早く德の門に入りけれど、栗園はひとり蟬をとらへ、小蝶を追ひ、犬とかけりて光陰をむなしく過しぬるに、父屢々之を規すれども、馬耳東風、兒はつゆきかんともせず夏の長き日、たゞ捍さしては蟬かげろふを捕ふるをのみ己が業にし、冬のみじかきひかげだもつゆ惜まず、ふけてはくらし、くらしてはあかし、いたづらにのみ過ぎぬ。母いたく之を憂ひ、ある日、栗園を膝下に招き、形を正し、顏色を改め、さて曰ふやう、汝、學を講じ、身を修むる事を知らずば、何を以て世にたつ事のなるべき。汝年なほ若しとて、遊戯にのみふけりて、あづさ弓、またたちかへる年月と思ふや。早く心を改めずば臍をかむとも及ばざるべし。蜘蛛を見よ、藝あらずや、蜂を見よ、能あらずや、虫けらすらなほかゝるを、汝は人の子に生れながら、學なく、能なく、一生を仇に過して、其身をけがし、父をけがし、祖先をはづかしめんとす。栴檀は二葉よりかんばしと聞くに、汝はいかなる母が子なればにこそ。あはれ世には、千ひろの底もあらぬれど、あつぱれ男兒をいたづらにはぐくみては、又身を容れん淵もなき心地ぞする。我子よ、母をかなしまば、今より心を改めて、學を修め、道をならひて、世の人の子のかずにも入りてよと諄々と説き諭しけるに、栗園沈吟やゝ久しくして曰く、兒あやまてり、あやまてり、只今より行を悛むべし。既往はゆるし給へとて決然

遊器をうちこぼちて謝しけるに、母いたくよろこび、おろかなる母が言の葉、よく用ゐくれけるよとて、其頭を撫でゝ紅涙を流しけり。父もまた大によろこび、さりてぞ親の子や、親の子なれど、親よりはまさりたる子になれかしとて、共に栗園が頭を撫し、泣きてよろこび、速に師を擇び業を授けけり。栗園も性はもと賢、母が紅涙の身にしみてより、學びの道をたゞ一心に尋ねてまたわだし事を省き、螢雪をつむ事三年、四書五經、文選皆よみ卒り、早く諸生にぬきんで、年まだ壯ならざるに、博く學の道を極めんものとて、父に請ひて遊學し、敎を帆足愚亭に執りけるに、愚亭擢でゝ都講となしぬ。既にして龜井昭陽の門に入り、後上國に遊び、篠崎小竹、齋藤拙堂、野田笛浦の諸名流と交りを通じ、學いよ〱すゝみぬ。後に、小竹之を水戸侯にすゝめ、遂に儒員となり、門生弟子いと多かりき。栗園人となり倜儻磊落、忠孝天性に出で、かつ奇拔によく時勢を案し、心を國事につくし、職をとるに直を以て動かず、かつて弘化中、黑艦浦賀に來り、强ひて互市を請ひ、勢ひ甚だ迫りけるに、幕府は之を許さんとし、朝議之を執つて不可とし、物論囂然、藩士黨を分ち、内訌まさに起らんとせしに、藩主之を患ひ、栗園を超擧して政事に參與せしめしに、小人輩其剛直を忌み、夜城門に榜し、新參政を殺せなど書して、栗園をして畏怖職を去らしめんとせ

しかど。栗園は泰然として動かざりきとぞ。其度量以て知るべし。

後慶應戊辰、伏水の變に際し、藩主京にありて栗園を召しければ、栗園京師に至り、行く〳〵當時の狀態を見、京に至り、人を以て廷臣に說かしめて曰く、臣、昨、大津をすぎけるに、諸藩の兵屯集を設けて誰何す、行旅窘する甚し。是れ徒らに怯を示すのみ、一雄藩に命じ、京畿を守り、六師東下直ちに賊巢をつかば、則ち沿道よろこびむかへて誰か敢て礫を錦旗に投せん、若し遷延日を曠くせば、賊必ず隣境を誘ひ、亡命を招き、險を扼して拒がん、天下また知るべからずと、岩倉公之を嘉納し、乃ち書をつくり栗園をして東海道鎭撫總督に致さしめ、遂に王師東征、江戶城を收めぬ。其他なほ、策をたて、不可と云ふ事なく、職をとつてつくさゞるなく、孝經翼、日本智囊、寤眠錄等の數書をさへつくりて、大に世を稗益したり。あはれ、母なかりせば、卓絕偉大の鴻儒栗園も、一匹夫の身にて終るべかりしに、此母が訓導、むかし楠氏夫人が正行をして忠孝の士となさしめたるに劣らぬ功にして、大切なるは家庭の敎育にこそ。

七郎兵衞の女

山本正周

備前の國兒島郡小串村に、七郎兵衞といへる農民ありけり。家もとより貧しかりけれど、其の女のなにがしといへるは、幼き時より人の家に傭はれ、下婢をつとめけり。程經て家に歸りけるに、父はいたく老衰し、其の母といへるも繼しき間なるが、之も大に衰へたるを見ていたくうれたみ、之よりは家に留りて、女ながらも力のあらん限り働きて、とにもかくにも父母を養はんものと心を定めけり。さるほどに、女業にては兩親を養ふは難からん、善き婿を迎へて共々に親を養はずやと頻に親戚の勸めしかど、女は之を斷りて、人の心は測り難きものなり、若しも善からぬ婿を迎へて、父母の憂を増し、後に悔ゆるとも甲斐なかるべし。夫より、われ専ら心を盡して養ひ奉るこそ心易けれとて、遂に親戚の言にも從はず、身のなりふりは搆はゞこそ、唯一心に耕耘をつとめて、能く孝を盡したりしといふ。

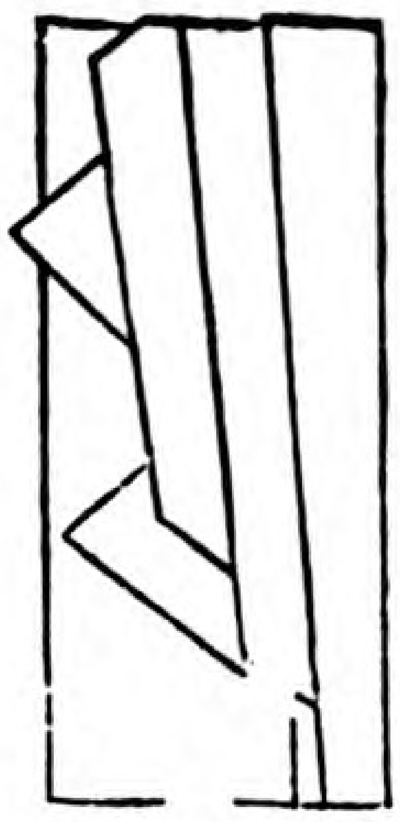
家政



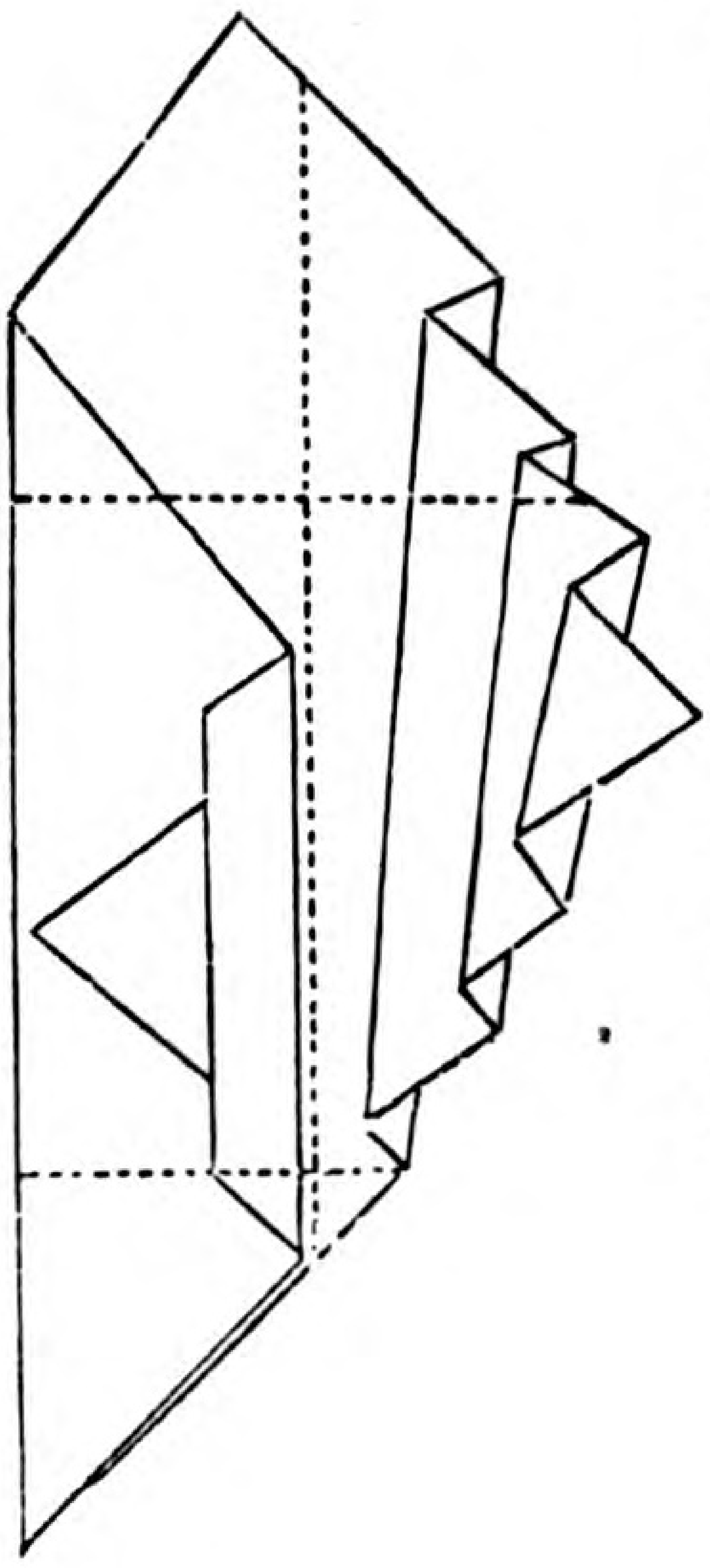
折形

有住齊

蠟茶包

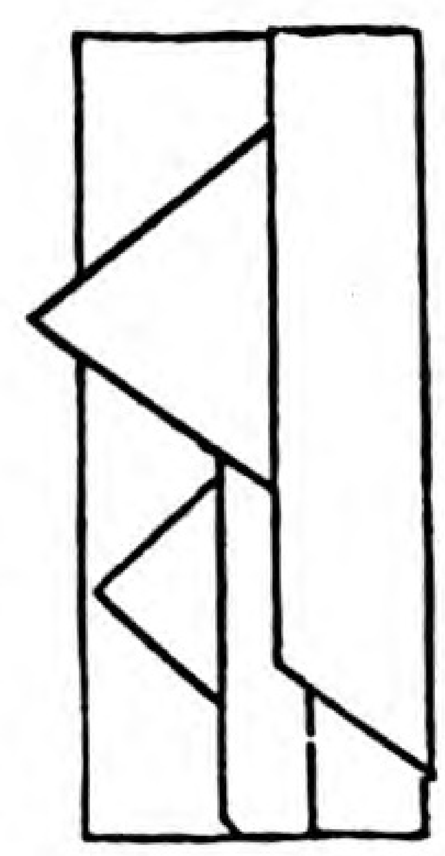


酒の酔を醒す薬也。押臺につく時もかく包む

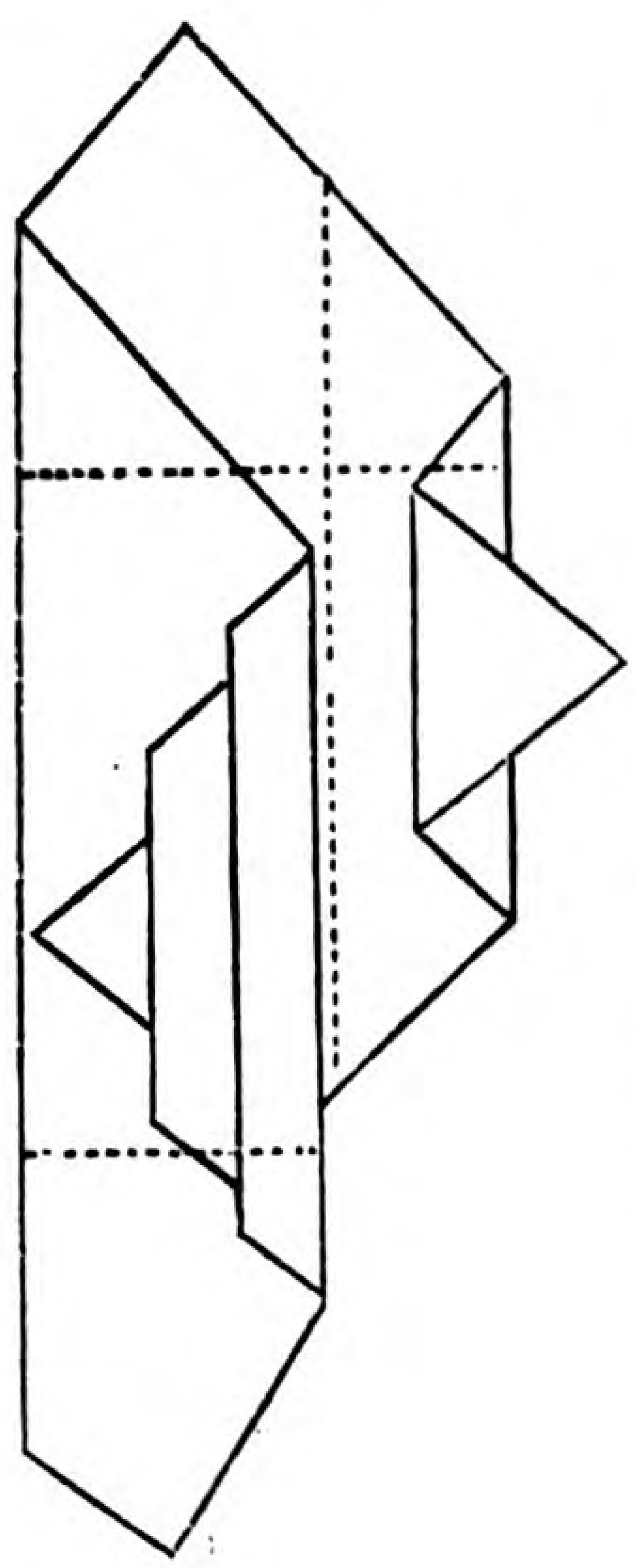


れなじく上下と右とを開きたる處。

篦刀上包



是は産所に用ふ、すべて白紙なり。水引も総銀をもちふ。刀は青竹にて造る也。



れなじく上下と右とを開きたる處。



茶の湯

茶道客方心得草（續）

孤峯菴碌仙齋不羨

關　葦雄

（但し客方喰事の方法は、大に規則有之事なれど、爰に言盡すこと不能、長きに失すれど讀者も煩はしきを感ずる事あらん、懐石の喰方は別に示すべし）右喰事終らば、暇乞して退くべし。されども、喰事濟て早々歸るは、茶道上にては失敬也。飯後薄茶の一服も喫て、徐々歸るべし。（但此暇乞するにも、今日は參上御茶戴き種々御珍器拜見飲喰迄御叮嚀之御取扱に預り、難有存候抔と、心實に徳義を帶びて露述すべし）次に、歸るに望み、客は床の掛物、花、爐風爐の釜　棚物等再見して立去べし。亭主は玄關、或は路次口迄見送りすべし。先是にて薄茶一遍の客振は概略を盡したり。尚亦讀者諸嬢に不審の箇あらば、本誌に就て質問有べし、反復答辨すべし。

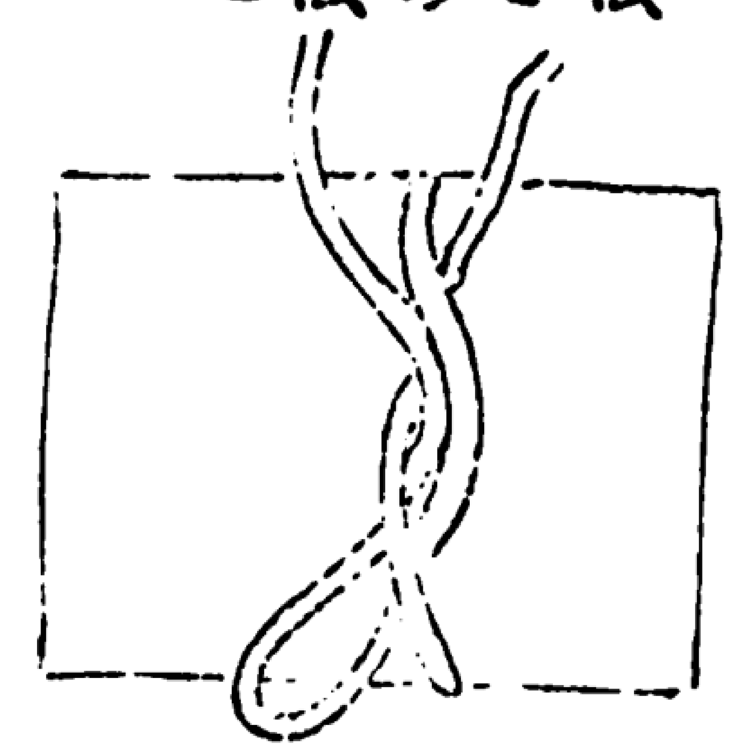
附言、第百五十五號二十四頁の下段十二行目べしの下に「其二指の腹に茶の付たるは、懐中の紙にて拭ひ取べし、又疊紙をちひさく折畳て、夫を取出し茶碗の呑口をふき取りて無妨」の五十二字を脱す。

女中行列狹箱守刀守袋の花結

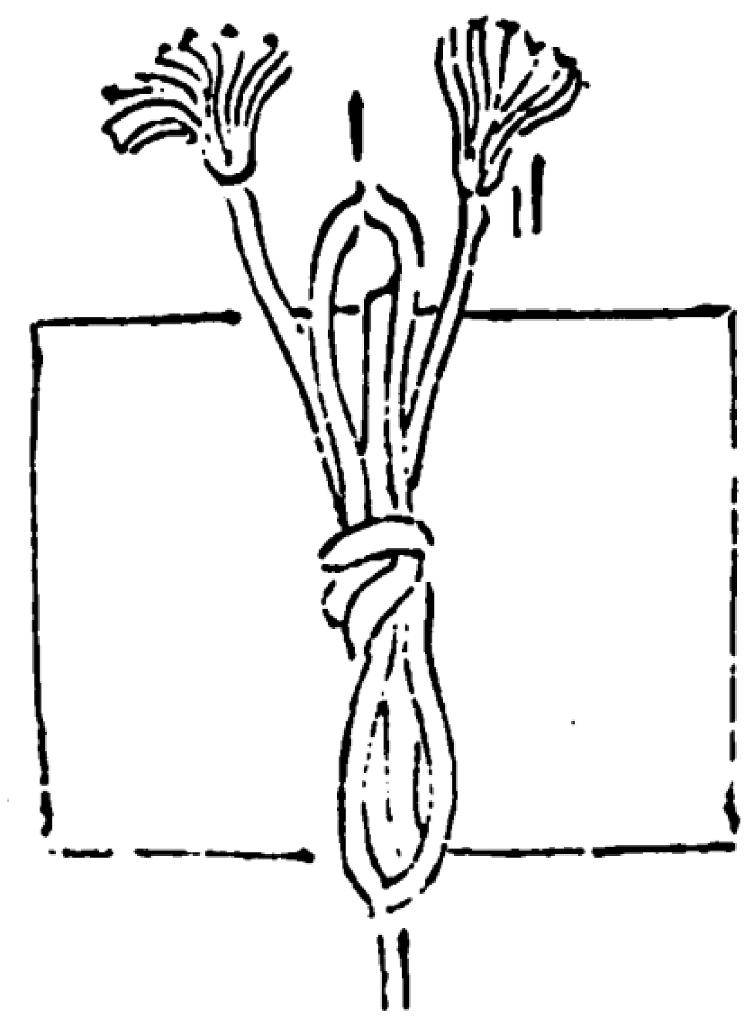
有住教場にて　某　童

挾箱は、第一圖の如くかけて第二圖の如く結びたりしや、又第三第四の如くわりしや、この結ぜんさまは、れはかたを記せるなり。

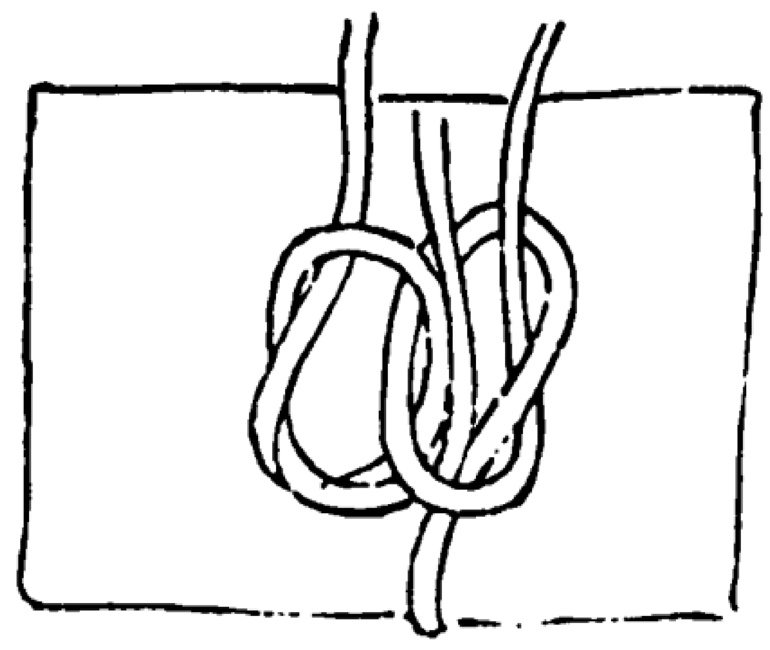
第一圖　はさみこ一



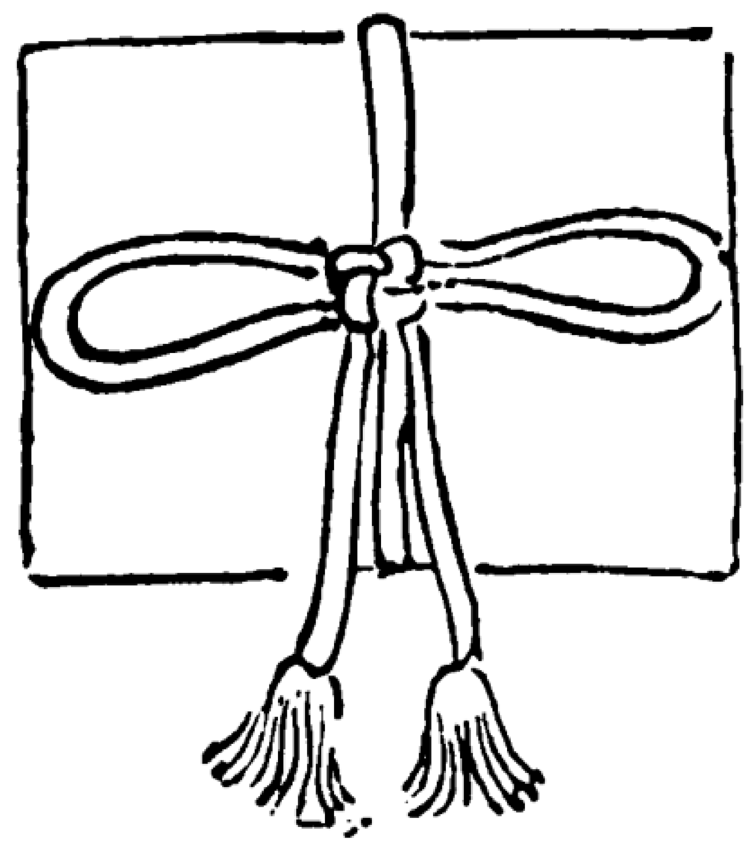
第二圖　はさみこ二



第三圖　一

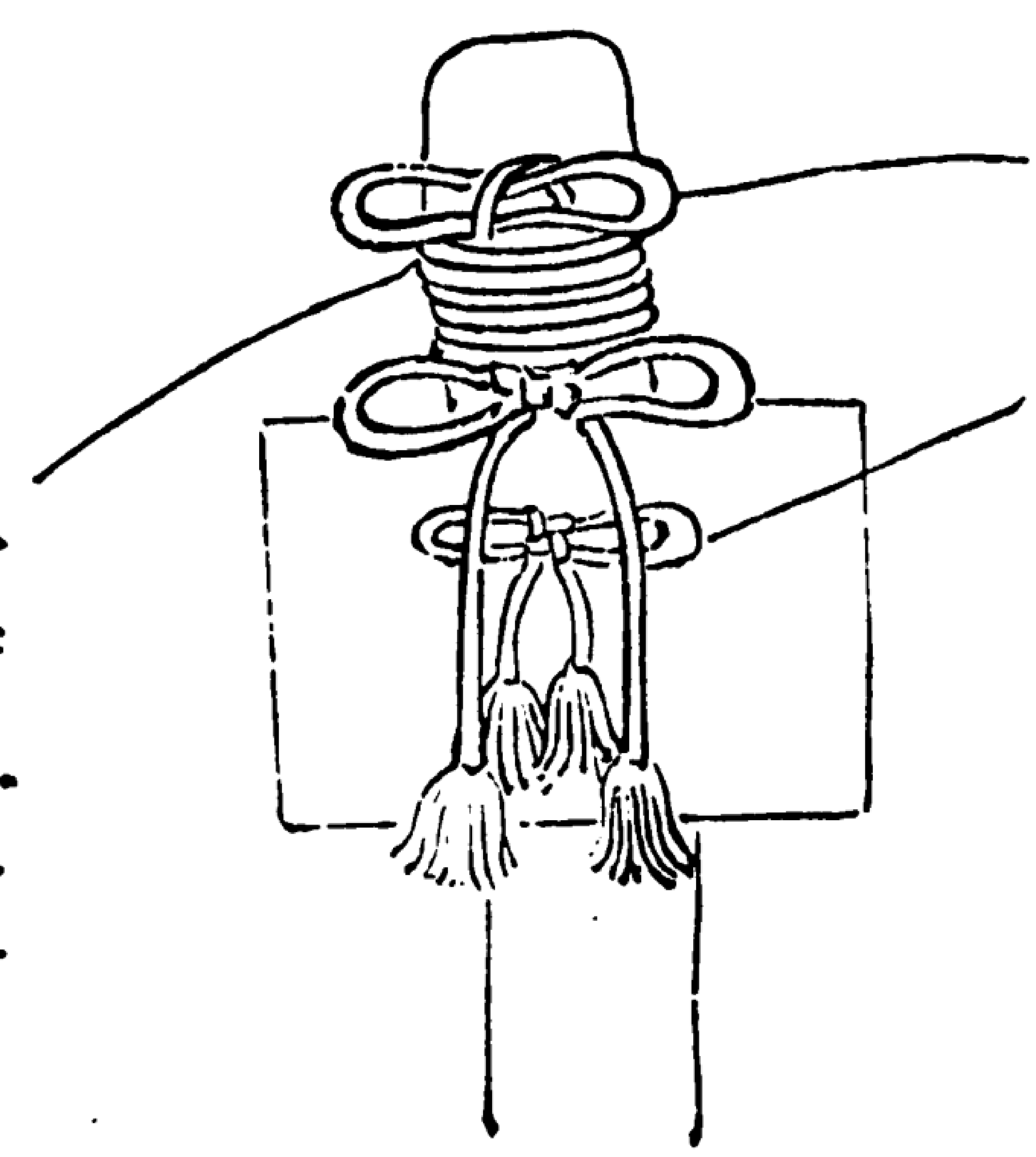


第四圖　二



又守刀守袋の様はいかにありけん、見し人をしへてよかし。

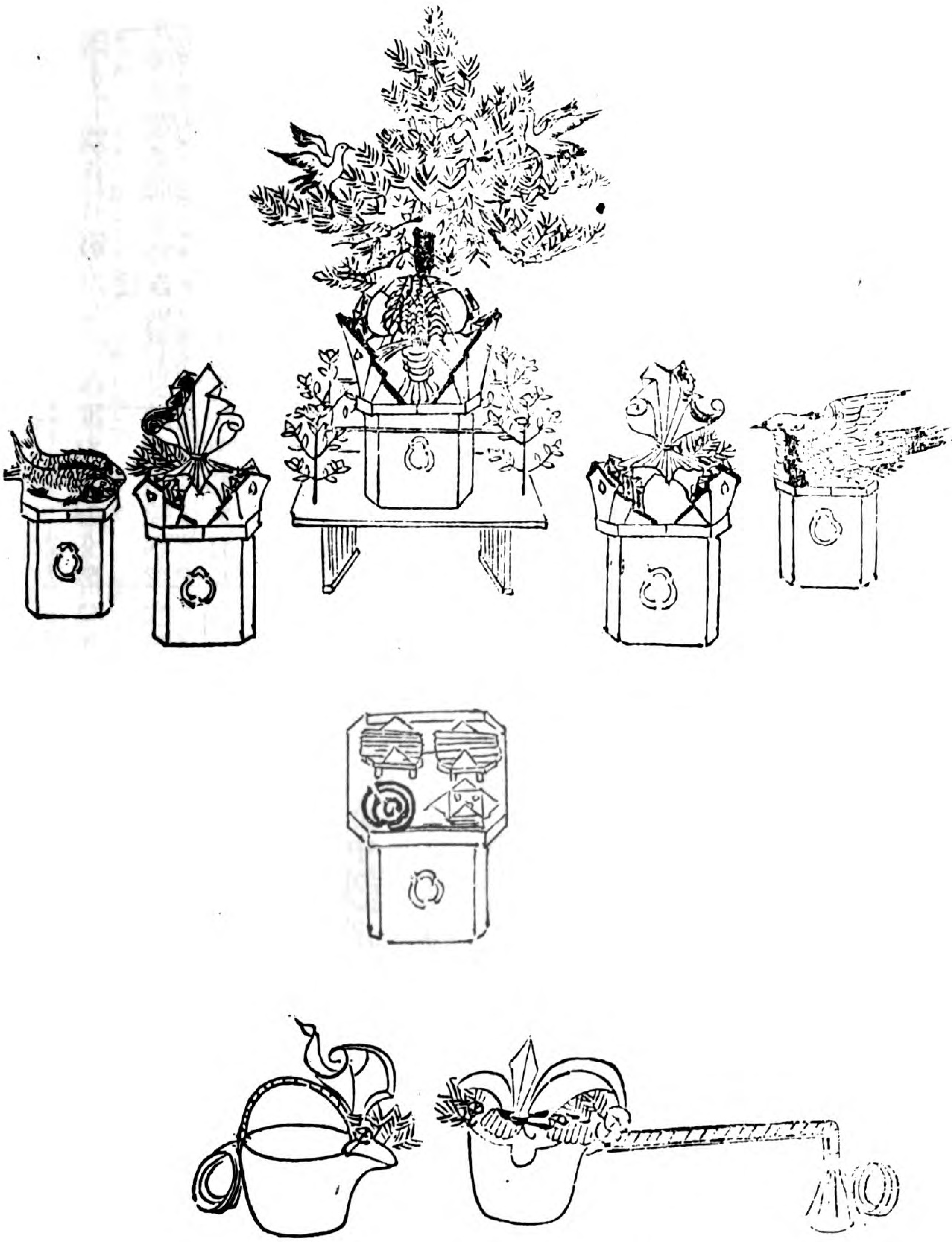
守刀守袋



婚禮の様（一）

有住常子門人　みを子

今の世の婚禮の例として記し出せる書もあらず、ありと見れど近き世様を書とゞめたるなりけり。實にあたらに記なせるはありやなしやと都人にとはまほ



しうなむ。

こゝに、是の法のれはかた今の世にかなへりと思はるゝを取て、かきなし見んとて、いさゝか其樣のはしばしをかきつく、ことし五月五日神田の里の三井某が家に此祝ありき、其樣をしも。

神床の供物

婚禮の祝には、二柱の御神をまつるべき神床を設けて、種々の御贄を、百の机にすゑ、甕に御酒をみてゝ、山野海川の物を積ならべて、さて、二柱の御祖の神をまつりまをして其御前にて盞結（三々九度と俗言にいふ）をなすなり。

これみのさまは、近世ぶりにも偏せず、今樣のおやしきにも偏せずして、是ぞ是の式のしかるべき樣なりける、其樣をゑがきたるものひとひらこゝに取いだしつ。

御神床供物

鳥　雄二羽

瓶子　白木三方　雄蝶花形糸口花

紅白蝶純立

長柄銚子

老松紅白梅根笹

餅蓬萊　白木三方

下盃　八足机

大引渡饌　白木三方

御鏡餅二枚

伊勢海老鰯包

瓶子　白木三方　雌蝶

加へ提子

鯉　二尾

たちぬひ

西山いた子

（九〇）めをと巾着

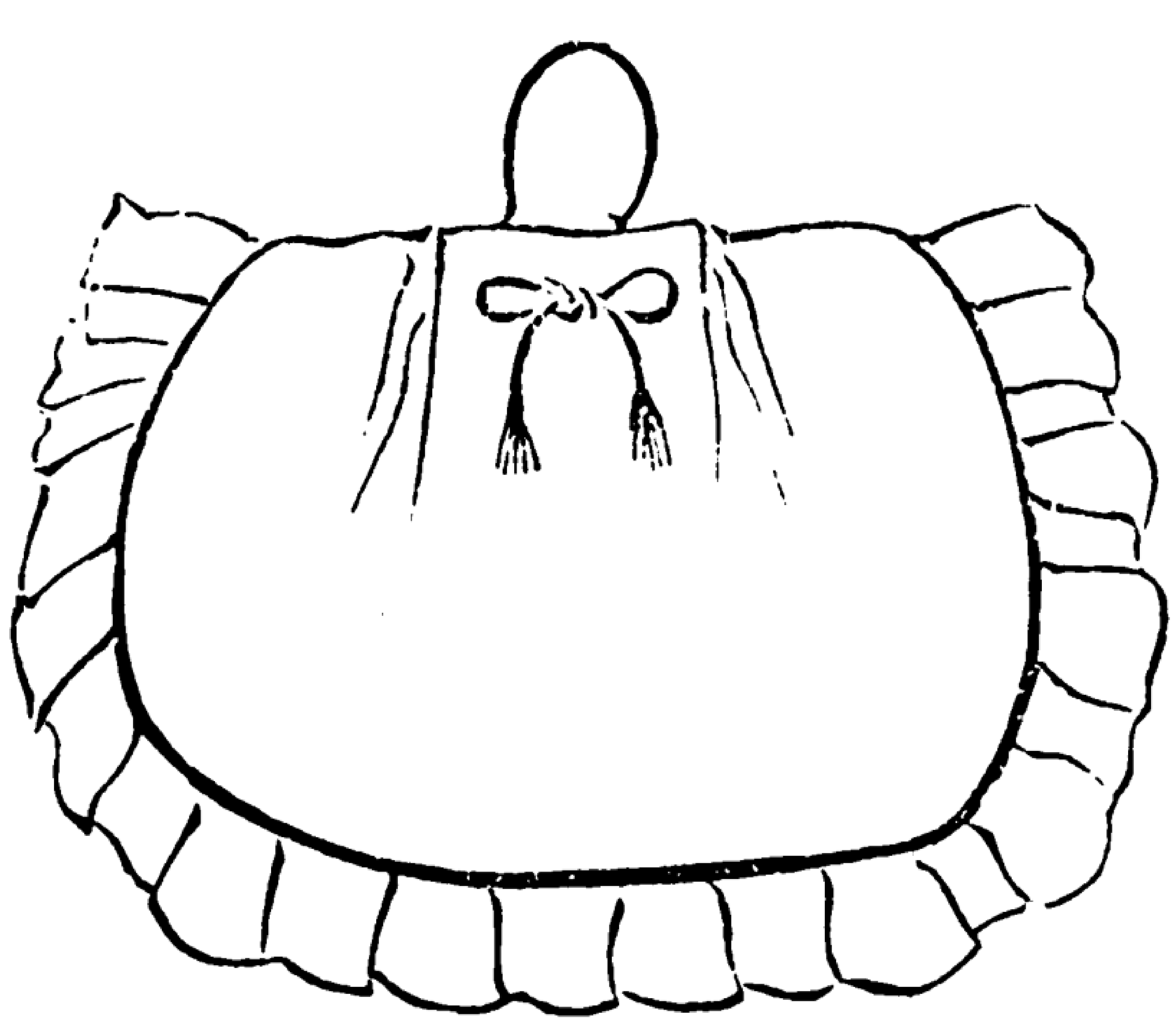
めをと巾着は形ちは巾着と同じにして、金錢を入るゝに都合よからしめんため、中切れを縫ひこみて、中を二つ三つにしきりたるなり。先づ半紙を巾着の

形に切り、表切れは少しあつきもの、羅沙、天鵞絨、緞子、博多の如きもの二切、即ち兩側となるものを半紙の形に合せて裁ち、その裏切をまた二片同じ形に裁ち、半紙を表の裏につけ、裏切の表と表切れの表とを合せて、口になる方をぬひ、引き返しおくべし。兩側ともさやうになしおき。さて中を二つにしきらんと欲せば、中切れ二片、三つになさんと欲せば、中切れ四片を、毛襦子、巾金、よろしきは甲斐絹、綸子やうの物を、表切と同じ形にたち、二片そろへて、口になる方を表の如く縫ひ、引きかへし、表切の間にはさみ入れ、巾着の如く、一はりぬきにしてまはりをぬひ、ひきかへしてひだをとり、紐をつくるなり。

（九二）ひだつけ巾着

之も巾着と同じ形にたち、まはりに一寸ばかりの切を長く切り、兩側を裏に折りかへし、二つに折り、表切のまはりをはかり、長さをよく合せてひだをとり、表切れの間にはさみ例の一はりぬきにしてぬひまはし、ひきかへしてひだをとり、紐をつくるべし。

乙の圖



だいどころ

一すゞき

すゞぎは、六月より九月迄を期節とす、あらひ、刺身、焼肴、椀種に用ふ。

一せいご

五月より八月迄を期節とす、鹽焼、あらひ等に用ふ。

一こち

六月より八月迄を期節とす、あらひ、わんだね、煮肴、さしみ、前盛等に用ふ。

一めこち、はらこち、ねこち

右三種とも期節は夏にて、料理方前に同じ。

一まいか

三月より五月迄を期節とす、てり焼、うま煮きのめあへ、天だね、すの物杯に用ふ。

一つのいか

期節は前と同じ、うま煮、てんだねに用ふ。

一われりいか

前同様、てり焼、甘煮。

一やりいか、するめいか、ひいいか

右いづれも、甘煮、てり焼、鹽焼に用ふ。

一鮑

鮑は夏を期節とす、鹽むし、茶椀種、酢貝、水貝、甘煮、ふくら煮、等に用ふ。

一赤貝

二月より九月迄を期節とす、酢のもの、あらひ等に用ふ。

一鰯

鰯の本節は、五月より七月迄とす、鹽焼、酢のもの

つみいれ、杯に用ふ。



秀歌集(二十二)

鹽井正男

○

霞立つ末の松山ほの〴〵と
浪にはなるゝ横雲の空

○之は新古今集の春の上にあり。藤原家隆朝臣が建久三年攝政太政大臣家百首歌合に春曙と云ふ心を讀み給へるなり。○霞立つ末の松山。立つ霞の末の末の松山といふ意にて、霞立つは、直ちに末の松山を形容したるにあらず。立つ霞の彼方の末の松山といふ意なり。霞の立つ末と松山の末とを引きかけたり。末の松山は、陸奥にあり。○ほの〴〵。ほの〴〵見えてといふべきを、略して、ほの〴〵といへるなり。即ち「かすかに見て」の意なり。○浪にはなるゝ横雲の空。夜の明けぬうちに、雲と浪とが一所なりしが、明けゆくまゝに、雲と浪と分れたるをいふなり。横雲とは、横になびきたる雲のけしきなり。

○一首の意は、立つ霞の末に、末の松山が、かすかに見えて、沖の方には、横雲が浪にはなれゆくといへるにて、上の句は陸のけしき、下の句は海の景色を一目に見わたしたるけしきにて、はなやかなる春の明方の山水、げに、日にうつり來て、いふむかりなく、はなやぎたり。

○

春の夜の夢のうき橋とだえして
　　嶺にわかるゝ横雲の空

○此歌も同集同部にありて、藤原定家朝臣が、守覺法親王十首歌よませ給ひたる時によみ給へるなり。夢の浮橋。夢といふことなり。本居翁の玉勝間に、昔、大和國に夢のわだといふ所ありて、そこに渡せる橋を、夢の浮橋といひつるが、夢といふ詞によりて、夢のことにもいふやうなりしなりとあり。或は、夢は定めなきもの故に、夢の浮橋といひ初めたるなりといふ説もあり。いづれがよろしきにや。○とだえして。中途にて絶えたるなり。即ち、夢を見はてずして、春の夜の眠りの、さめたるなり。

○一首の意は、夢も見はてずして、春の夜の眠りは、さめたり。見れば、横雲が峯に離れゆく時であるといふにて、上の句は、春の睡りの覺めたるをいひ、下の句は夜の明けはなれたるをいへり。古來、此のうたに、種々のこみいりたる深き思想のある如くいへど、別にさるむづかしき思想あるにあらず。畢竟、上句と下句との間に、見ればといふやうなる詞を置きて見るべきを知らざればなり。前の家隆卿の歌と共に、よく當時の調を代表せる歌なり。

○

おほ空は梅のにほひに霞みつゝ
　　曇りもはてぬ春の夜の月

○之も同集の同部にありて、同人が、同時によみ給へるなり。○おほ空は梅のにほひに霞みつゝ。此末に、「ありて」といふ詞を置きて見るべし。即ち、「大空は梅の匂ひに霞みつゝありて」といふ意

なり。「空が梅の匂ひにかすむ」とは、霞みたる空に、梅の花の香の匂ひみちたるを、斯く梅の匂ひにかすむと、形容せるなり。○曇りもはてぬ。うすくかすめるをいふ。

○一首の意は、大空は、梅の花の香にて、かすみてありて、雲霧などのごとく、深く曇らず、ほんのりとうすく霞みたる春の夜の朧月のけしきよ、誠にしくものなきものぞ、と彼の「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき」の歌を、更に巧みに取りなしたるなり。「梅の匂ひに霞む」の一句、思ひきりたる云ひざまにて、此の一句、眞に定家が古今の名家たるを證すべしといふも可ならむ。彼の「近江の海夕波千鳥ながなけば心もしぬに古れもはゆ」の夕波千鳥の思ひきりたる詞づかひを以て、人丸の歌仙たるを見るべきと、同一の趣きあり。

○

梅の花にほひをうつす袖の上に
軒もる月の影ぞあらそふ

○之も同集同部に同人が、百首歌奉りし時によみ給へるなり。○梅の花。「梅の花が」といふことなり。○にほひをうつす袖の上に。此のにほひは梅の香なり。つやにあらず。梅が香の、いとめでたくて、衣の袖もかをりてればゆるを、梅の花に心ありて、人の袖に香をうつすといひなしたるなり。うつすは、もと、こゝより彼處へ置きかふる意にて、されど、一物の香の、他の物に染むをも、香を置きかふる意にて、かくうつすといへるなり。古今集の歌にも、「梅が香を袖にうつしてとゞめては春はすぐとも形見ならまし」などあり。これは、

我れより梅の香を袖に染め置く意なれば、香の染むことは、同じ。また古今六帖に「おもひ出で丶見に來ざりせば梅の花誰れににほひの香をうつさまし」などあり。○軒もる月の影。軒の隙間よりさしくる月の光りなり。さす月の光りを、月影といふことは、常のことにて、古今集の秋の歌に、「木の間よりもりくる月の影見れば、心づくしの秋は來にけり」、或は千載集に、「山風にまやのあしぶき荒れにけり枕に宿る夜半の月影」或は定家卿の歌に、「わが宿の光りをしめて分れいれば月影白し深山べの秋」などある、皆、さす月の光りをいへるなり。○あらそふ。負けじと競ふことにて、ここにては、梅の香の、めでたくかをる袖の上に、月の光りが、また美しくさしにほふを、月が負けじと爭ふよしにいへるなり。

○一首の意は、梅の花がめでたくかをる袖の上に、軒の隙間よりさし來る月の光りが、また、梅の香にまけじと、さしにほふよしにて、春の夜、軒ちかくさし出で丶、眺められしに、梅のはな誠にめでたくかをりて、袖もかをりてればゆるに、折りから、軒端の月の光りが、また、面白くさしにほへるけしきを、梅に心ありて、袖に香をうつし、月に心ありて、梅の香に負けしと、光りにほふよしに取り立て丶、よめるにて、歌も、また、心のかをりめでたき上に、詞の色の美しさを添へて、いふばかりなく、けしきある歌ざまにこそ。

○

照りもせず曇りもはてぬ春の夜の
朧月夜にしくものぞなき

○之も同集の同部にありて大江千里が、白氏文集

の中なる驪陵春夜詩不明不暗朧々月といへるを引きてよみしなり。○しくものぞなき。及ぶものなしといふことなり。○朧月夜。うすく曇りたる月夜なり。

○一首の意は、明かに照りもせず、また、さりとて、全く曇りもせずして、ほのかなる春の月夜に及ぶものはない、實によきけしきなりといへるにて、春の朧月夜をほめたるなり。

○

淺みどり花も一つに霞みつゝ
朧に見ゆる春の夜の月

○之は同集同部にありて、藤原孝標女が、祐子内親王藤つぼにすみ侍りけるに女房うへ人などさるべきかぎり物語りして春秋のあはれ何れにか心ひくと爭ひ侍りけるに人々多く秋に心をよせ侍りけれど斯くはよみける。○淺みどり。淺綠りの空もと云ふべきを。空もを略したるなり。淺みどりとは、綠りの色の淡きを云ふ。春の空を形容したるなり。なほ、續千載集の春の夜の歌に「あさみどりかすめる空に春ながら山風寒く雪はふりつゝ」のあさみどりのごとし。○花も。もといへるにて、空もとあるべきを、略したるを、知るべし。花も、あさみどりの空も、一つにかすみてといふことなり。○一つに。一樣にといふことなり。空も、花も、一樣に霞みて、ほのかに見ゆる春の夜の月は、面白しといへるにて、さて、皆樣は、秋をこそといはるれど、それは、春にこそ心をよするなれといへるなり。

源氏物語講義（三）

下田義天類

はしめより我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものに貶しめ猜み給ふ。おなじ程、其より下﨟の更衣たちは、ましてやすからず。あさゆふの宮仕につけても、人の心を動かし、うらみをおふつもりにやありけむ。いとあつしくなりゆき、もの心ぼそげにさとがちなるを、いよ〳〵あかずあはれなるものにおもほして、人の誹謗をもえはゞからせ給はず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。

○はしめより我はと思ひあがり給へる御方々云云　此の一句は、他の女御更衣の方々の、悋氣嫉妬を起し給ひし由を書き出したる所なり。○はしめよりとは。入内の當初よりなり。○我はと思ひあがり給へる御方々なとは我は必御寵愛を蒙らむと自負して入内したる女御更衣の方々なり。此の御寵愛を蒙らむと思ひあがり給へる由の文字に、親里の威權あるよし、即身分出所の賤しからざる趣を含めたるものと見るべし。親さとに威權あれど、第一には支度萬端に不足もなく、第二には世間の人の思はくも高く、第三には主上も親さとへ對して御重任遊ばさるゝ等の風習ありて、身分出所の賤しからざるものは、常に御寵愛を蒙る實例多かりしかど、御身分の賤しからざる女御更衣の御方々は、皆其の御入内の初より、我こそ君の御寵愛を得めと自信して御奉公に上りしものなり。されど、こゝの、我はと思ひあがり給へる御方々といふ語は、文章の表面よりは、唯御寵愛を得べきものと自負して入内したる趣に過ぎざれども其の裏面、即御寵愛を蒙らむと自信したる原因

には親さとの威權をたのめる意義を含めるものなれむその心して心得べし。即前段に、桐壺の更衣のことを、いと止むことなききはにはあらぬがといひし所の照應なり。○めざましきものとは、眼覺しき者にて、こゝにては、あきれたもの、若くは膽のつぶれたをなどなどの義なり。貶しめ妬み給ふとは、是まで我はと思ひ上りておはしまし、女御更衣の方々が、彼の桐壺の更衣を貶しめ妬み給ひたりとなり。

さてこの一句は、入内の初より、親ざとの威權有るをたのみて、我は必御寵愛を蒙らむと自負自慢して御奉公に上りし女御衣更の方々は、自己が豫想と打つて變りて、おのれに御寵愛の厚からざるのみならず豫ねては物の數にもあらじと侮り居たりし桐壺の更衣の、存外なる、御寵愛を蒙るを見て喫驚に堪へず、下衆下﨟の分際として、我々を有るかなしかに踏附けにして、あの御寵愛を蒙ること、肝の潰るゝほどあきれたをなどよと、めざましきものに貶しめ妬みたりとなり。

○おなしほど、それより下﨟の更衣たちは、ましてやすからず。此も前の句と同じく、他の方々の悋氣の起りを寫し出したるものなり。○おなしほど、とは、此の桐壺の更衣と同輩の更衣なり今一段身分の貴からぬ方々をさせるなり。○ましてとは、前段にいひし方々にはましてなり。○やすからずとは、悋氣のほむらを壓へ兼ねて心を苦めたりとなり。

さて此の一句は、身分ある女御更衣の方々すら、前段に云へるがごとし。まして彼の桐壺の更衣と同輩の更衣方、若くもそれより下﨟の方々は、物

の數にも非らずけおされて、悋氣のはむら厭へ難く折も有らは何とかして此の怨をはらしくれむと心を苦しむる方々多かりきとなり。おなしほどといふ下へ（ナル更衣、又）の數字を加へて見るべき所なり。ましては句の上にうつして見るべし。やすからすといふ語の上には、前句の貶しめ妬み給ふといふ意をうつして、嫉み妬みの爲に、常にその心も安からずとやうに續けて見るべし。この二句にて一小段なり。此の段は女御更衣の方々を上中下三段に分ち、此の上中下三段の女御更衣たちが皆桐壺更衣一人を妬み怨みたるよしをいへる所なり。上臈には貶しめ妬むといふ語を用ゐ、下臈にはやすからずといふ語を用ゐたり。悋氣嫉妬の程度を書き分けたる所に眼を着くべし。

○あさ夕の宮仕につけても、人の心をうごかし、怨を負ふ積りにや有りけむ。いとあつしくなりゆき、もの心細げにさとがちなるを。こゝよりは桐壺の更衣の上を説き出したるなり。○朝夕の宮仕につけても人の心をうごかしとは、桐壺の更衣の朝に御前を退くとては他の女御更衣たちの嫉みをかさね、夕に御前に召さぬとては他の女御更衣等の妬を加へ、朝暮晝夜の分ちなく、其の出入につけて常に他の人々の嫉妬の情を增さしめたりとなり○うらみをおふつもりにや有りけむとは、かくの如くして朝夕に人の怨を負たるが、其の怨の積り積りたる故にや有けむとの義なり。○いとあつしくなりゆきとは、何かと氣兼ね苦勞の絶えざりし故に、精神を勞し過して、遂に病氣づき、此の頃はズンヾ衰弱して出仕もかなひがたきやうになりたるよしなり。あつしくとは羸瘦したるさまな

り。○もの心細げにとは、何となく心細そうになん。○さとがちとは里亭勝の義なり。即自宅療養の爲に宿下りして居ることのみ多きよしなり。この一くだりは、左の如く語を補ひて見るべし。

朝夕の宮つかへにつけても（多ク／）人のこゝろを動かし（其ノ怨）をおふ（コト屢ナリシカバ、其等ノ怨ノ）積り（タル故）にや有りけむ（更衣ハ遂ニ病ヅキ給ヒテ、此ノ頃ハ）いとあつしくなりゆき（ケレバ、御出仕ヲモシ給ハズ）その心細げにさとがちなるを云々。

とやうに心得べき所なり。餘りに筆を省き過ぎたれど、今試に補ひたるなり。怨をおふつもりにや有りけむといふ續けかたは、少しおだやかならぬやうなり。湖月抄に「あしかれと思はぬ山のみねにたにおふなるものを人のなげきは」と云ふ歌をこゝに引きたるよしに言へるはあたらぬことなり。いとあつしくなりゆきといふ所も、接續辭を挿入せざれど、句法の原因結果きはやかになり難し。其の他は補はざる方、かへりて文に妙味あれど、これは唯其の意味を初學の人に知らしめむとて、假に數語をさし狹みたるのみ。◆

○いよ〳〵あかずあはれなるものにおぼして、人のそしりをもえ憚からせ給はず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。此のくだりは、帝か此の更衣に對するありさまを記して發端にいづれの帝の御時にかと書き出したる文脈を結びたる所なり。○いよ〳〵あかずあはれなるものにおぼしてとは、さらぬだに御寵愛の淺からざりし桐壺更衣が、我が爲に他人の怨をうけ、それを苦に病みて病み着きたりと聞食して、彌々以て御寵

愛の深からざることを得ざるべし。殊に暫時御傍を放ち給はむことだに御心許なく思召したる更衣が病の爲に久しく侍坐せす、里亭にのみ籠りれはしませむ、戀々たる御情合も亦一層の度の高めしなるべし。帝かこの更衣の、めの心細げにさとがちなるを彌々わかずあはれなるものにればゝし食したる狀、察するにあまりありといふべし。○人のそしりをもに憚からせ給はずとは、かく御寵愛の切なるが故に、其の御本心をかき亂され給ひて此の更衣の御事につきては、世上の人の聞き傳へて誹譏譏謗し奉らむとすることをも顧み憚らせ給はずせさせ給ふまでにならせ給ひたりとなり。○世のためしにもなりぬべきとは、後世いましめの手本とも成りそうな位の御もてなし、即御擧動にてありたりとなり。

編者申す　左の一篇は、皇學館（伊勢）の教授森幹三郎の君より寄せ給ひしなり。源氏物語は、前項の如く下田歌子ぬし講義し給へば、爰に之を掲ぐるの要なき樣なれど、此の稿、元、下田ぬしの講述を本とし、且、下田ぬしが本誌に桐壺の講義を終り給ふは未だ長かるべし。されば、先づ爰に附りこし給ひし雨夜の品さだめを載せ、其の前後は、帚木の卷にかゝりし折、下田ぬしに補充を乞ふことゝせん。

源氏物語は空前絶後の大作なり。其の婉曲なる筆、其の幽玄なる想の如きは、到底吾人の窺ひ知るべからざる所。宜なり、古來幾多の文學者が、之が註釋に、之が評論に力を致して、玄かもなほ定説を見ざる事や。就中雨夜の品評の一段に至りては議論閑雅文の摸範として、婦女子品性の標準として、千歳の今も、猶赫々たる光明を放てるにはあらじか。嗚呼現時淫奔浮薄の空氣は至る處に滿ちくて、平安時代敗德の光景は、歷々として顯れ來れり、然して其の淑德を以ちて、其の貞節を

以ちて、一代に超然たりし著者紫式部の如きは、又見る事稀なり。吾人茲に感あり。即雨夜の品評の一段を抄出して、余が嘗て師の君下田大人につきて口づから授けられし講説の旨を本とし、併せて卑見を陳べて、極めて平易に且簡單に之が解釋を試みむとす。故に、故更に一字一句の上に細註は加へず。又なか〳〵に説きひがめたるも多かるべし。只幸にして本誌愛讀の令嬢淑女たちが修身の一助ともなりなんには、獨余が喜のみにらざる也。

雨夜の品さだめ

森　幹三郎

(解題)源氏五十四帖の内帚木の卷に出でたる一段也。梅雨ふりくらして、殿上物靜なる宵の事也。物語の主人公源氏の君が親しき友なる頭中將と、御居間桐壺にて物語の序、あらゆる方面より、多くの婦人につきて種々の品評を下たし一段也。

女のこれはしもと、なんつくまじきはかたくもあるかなと、やう〳〵なん見給へしる。たゞうはべばかりのなさけにて、手走りかき、折ふしのいらへ心えて、うちしなどばかりは、ずゐぶんによろしきもおほかりと見給ふれど、そもまことにそのかたをとり出でむえらびに、かならずもるまじきはいとかたしや。

頭の中將より先話の糸口を切りたり。女のこれはしものしもは助辭なり。世の婦女子これこそは言分なき女子よと批難つくまじきは世に得難くもあるものかなと、余は此の年頃經驗の上より次第〳〵に發見いたしました。其の故は、先女子の性質を見る上より、手紙のとりかはしをして見るに、

その返事、ほんのうはべばかりの人情を見せるのみにて、其の手跡はといへど草書の走りがきにて、よく時節場合を心得て返事返歌などをする。先手跡といひ、時にとりての文章といひ、歌といひ、隨分におもしろく、この婦人ならば大體に宜しきとは見侍れど、さりとて其の婦人手跡がよきとても、まだ〳〵書家の仲間入をする程でない。文章がよい、歌がよいとても、いかで文章家、歌人といふ事を得べき。その手跡なり、文章なり、歌なり、これがよく出來るといふ中に、きつと數へらるゝ人といふは得難きものでござりまする。

我が心ばたることばかりを、おのがじゝ心をやりて人をばおとしめなど、かたはらいたきことおほかり。おやなどたちそひもてあがめて、おひさきこもれる窓の内なるほどは、たゞ片方をきゝつたへて心をうごかすこともあめり。

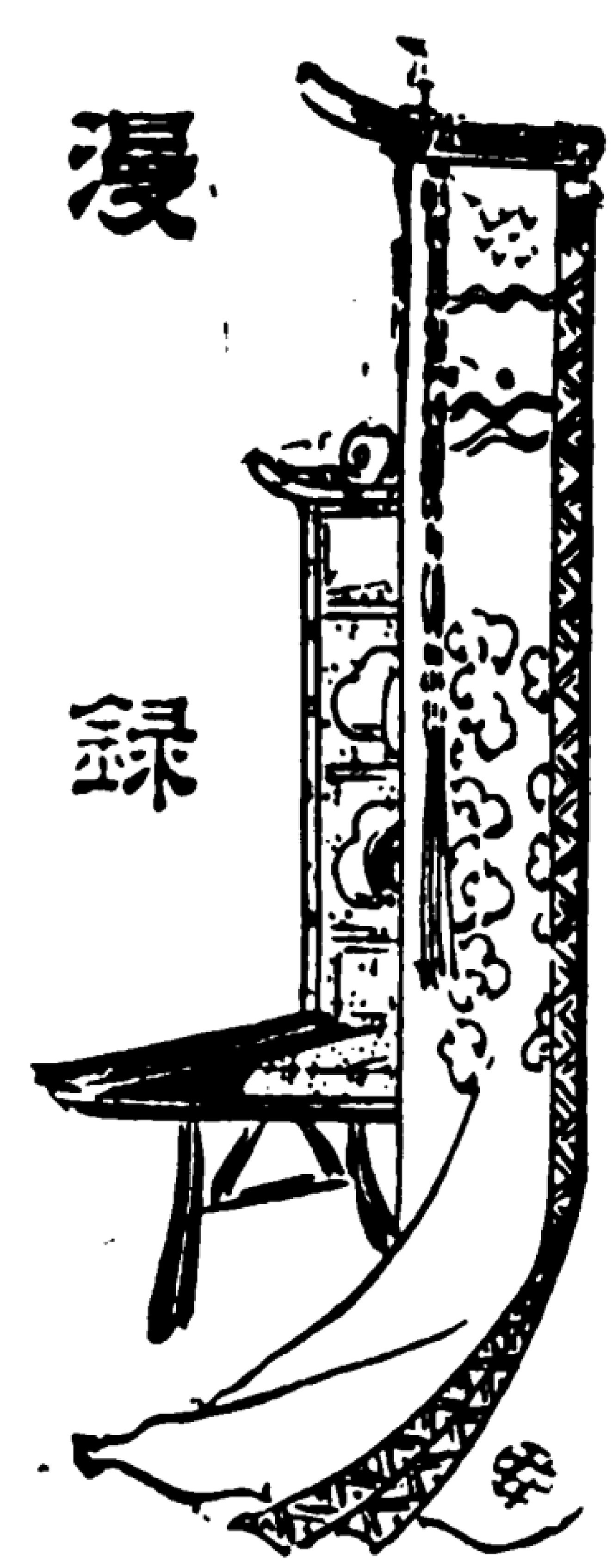
大方の婦人はおのが得意なる事のみを自分〳〵に自慢をして喜んで居る、而して人をそしりなどする。誠に氣の毒千萬なる擧動凡ての婦人に多し。おのれ琴の上手なれば、彼琴の下手なるをそしる。而して彼には、反りて茶の湯とか生花とかゞ上手なりとも、夫には少しも心付かず。又そしられたる者も、自分の上手なるを鼻にかけ、彼の下手なるをそしる。いづれも自分の短所を人の長所にはくらべず、人の短所を我が長所にひきあてゝ、自慢し、他をそしるなど、笑止千萬なる事多きもの也。以下更に進みて、親の元にかしづかれたる女のさまを說く、扨世間の女子兩親が傍去らず付添ひて、姫よ孃よと、掌中の玉の如く大切に育て、又召使の女等は、神佛の如くもてあがめて奉公する。

まだ出世前の女、末たのもしき深窓の中に育てらるゝ間は、たゞ僅ばかりの滿足ならぬとりなをも、男子は聞き傳へて、さる婦人ならばと、ぢきに心を動かす事もあるもの也。

かたちをかしくうちおほどき、わかやかにて、まぎるゝ事なき程、はかなきすさびをも、人まねに心をいるゝこともあるに、おのづからひとつゆゑづきて、しいづる事もあり。みる人後れたる方をばいひかくし、さてありぬべきかたをばつくろひて、まねび出すに、それしかあらじと、そらにいかゞはおしはかり思ひくださむ。まことかと見もてゆくに、見おとりせぬやうはなくなむあるべきと、うめきたり。

容貌も十人並に生れつき、あどけなくわかやかにて、未だ他へ嫁がざる事ゆゑ、一家經營の上につきて、あれやこれやと心のまぎるゝ事なき程は、つまらぬなぐさめ事、たとへば琴とか、茶の湯とか、生花とかを、人まねに稽古する。只一心に其の事にのみ從事するより自然に其の中一藝ぐらゐは大方に仕遂ぐる事もあるものなり。さすれば、見る人、即媒介の地位にたつ人は、其の女の不得意なる方をばいひかくして、其の儘にても宜敷迄に上達したる方の事をばとりつくろひ、形容して話し出すに、夫を聞く人はいかでそれ程迄にはあらじとあて推量に心に思ひくさす事あらむや。さて實際の事と思ふより、いろ〳〵に手蔓を求めて、その婦人と交際して、其の聞きし事まことか見もてゆけば、聞きしよりは見る方遙かに劣るもの也。見おとりせぬ方は大方なき者なりと頭の中將うめき出せり。これ雨夜の品評全篇の主眼なり。人品の上に批評を下せば如何なる人にも必ず、何

れにかは欠點あり。完全無缺といふべき人間はなきものなりと、紫式部自身の意見をぞ、頭の中將の口を藉りて述べ、さて此を敷衍して、以下縱橫自在に說き出せるなり。



漫録

主從心得草（上編續）

諏訪　忠元　寄贈

瑜伽論に曰、業天の惱ます所作者なしといへども、業果自から屬す、逃るゝ事を得難し。とあり。此心は、天道は罪人を責んと思召心はなけれども、自然とおのれとあらはれて、苦患をうくるなり、外をうらむる事なかれ。無量壽經の、天道施張。自然亂擧をあはせ見るべし。歌に、

あしき事人は志らぬとおもへとも
　天に口ありかべに耳あり

あらざらん惡事をなせぞ此世から
　責苦にあふて身をはたすなり

きれいなるうき世を橫に行ならは
　その行末は地獄なりけり

よき人と志らはうやまひ志たしみて
　其たゞしきを習ふへきなり

何事も兎角世間のあしき事
　見るにつけても我はたしなめ

盜みする人とて種はかはらねと
　つかひ過して身のつまるゆゑ

此歌の心をよく合點して、愼めやく。

前訓にいわく、正直は人間第一のたしなみ也。人の

本心は正直なるが生れ付にて、夫故少しにても僞つく歟、惡事をするがいなや、忽ち我腹中に急度氣味わるく覺かわる也、恥敷恐敷事也。わるき事をかくして、人はしらぬと思へども、我腹の中に我よくしる也。此しる心がすぐに神樣や佛樣と一体なり。しかれば、いわぬ筈、せぬはづの事を、いふたり仕たりするは、神佛の御きらひゆゑ、心にうけぬなり。されば、此本心の氣味わるく思ひてうけぬ事は、かまへて、急度、かりにもいふたりしたりせぬもの也。と御心得被成べく候。是心學の第一なり。歌に、

いつはりも人にはいひてやみなまし
　こゝろが問はゞいかゞ答へん

いつはりは人第一のきつなれや
　神も佛もにくむとぞきく

八百のうそを上手にならへても
　まことゝ一ツにかなはざりけり

此歌の心をよく考へ給へ、正直は神佛の好ませ給ふ第一なり。正直の心を以て安心の家にすむべし。又何に限らず、是はあしきと氣の付たる事は、堅く被成ぬことのにて候。是かろき事にあらず。幼稚の時より御成人の後まで、學文の至極と申は別の事にてはなし。只此惡敷と思ふ事をいわぬとせぬとの外はなく候とあり。此事至て大切也。幼學の人是をしれ〳〵。今の名高き學者を見るに、詩文章をよくし、文學しりたるを以て人にほこる。是何といふ間違ぞや、及ばずながら、脩身正意の心を心て修學いたしたきもの也。或曆々のいわく、經書を讀たる者はからくち斗りをきく、よまざる者はよき事をいふたりしたりするといひしと、むべなるかな。三才因縁辨疑にいわく、所詮學文の殿上といふは、心正直にし

て邪ならず、已を高ぶりて人を侮らず、柔和にして人と爭はず、貧賤をあはれみて富貴の人に諂らはず、高慢にして氣意地ならず、老たるを敬ひ幼稚をいつくしみ、已を謙くだし人を尊み、いかりを押へて物に堪忍つよく、誠ありて僞らさるを道を行ふ至極とす。人の學德學才といふは、心を丸ふして角ならず、物に交る事水の流るゝに隨ふが如くなるを德といふ。然るに、世間の學者を見るに、博學にして廣く事をしりながら、或は親へ不孝、又は君へ不忠、人と交るに僞り多く、高慢にして他人を侮り、心に角ありて假初の事にも人と爭ひ、貪り深くして富貴の人に諂らひ、家業を不精にして家身おさまらず、かやうの類ひ世間に多し。俗儒の記誦詩章の族、たとひ千萬卷の書を諳んずといへども、大學一卷よまざるに劣れり。四書國字辨學而の釋にいわく、學問をして天下の道理を知り、天下の事務をよくせんと思ふべし。少も名聞利潤の爲によむにあらず、詩文章を上手にするを詞章の學といひ、書籍を多く覺えたるを記誦の學といふ、此二ッを重にして、修身正意治國平天下の志しのなきを俗儒といふ。博學詩文も儒者の兼る所なれども、眼の付所が違ふとあり。是をよくしるべし。聖人の人を教ゆるは實用に施す爲也。今の學者の如く、經書を廣くよみ、詩文章に長じたるばかりにて、日用の行ひは小人とかわる事なし。學文したるとはいひ難し。能これを考へよ。歌に、

道といふ言葉に迷ふ事なかれ
　朝夕れのがなすわさとしれ

大和論語にいわく、白山大明神御詫宣に　人よ愼に持て、天地の間僞り曲れる者をいるべき所なしと。御飯は、ゆはで喰れぬといふ事を篤としらぬと色々

の榮耀が起るもの也。我身上になつて、人に使ひ人を養ふて見るべし。中々養なへるものにあらず。其氣苦勞いくぞくぞや。家來の病氣は則主人の煩ひとなる。箸のころんだ迄も皆主人にかゝる事をしるべし。又大事の心得は、主人の心に入らんとして仕ふべからず。只忠義の心を以て、眞理に背くまじと思ひて仕ふべし。主人の心に入らんと欲すれど、自然と表裏輕薄をなすもの也。是よろしからず、只忠義を第一としてつとめ働くべし。又家來たる者は主人の恩惠の早きを望むべからず。唯己が勤べきを大切に勤めて、其餘は忘れたるが如くにせよ。是福徳を天に預け置也。福徳を天に預けれども、大なる利足を付て下さる間、必事をせいて本迄失ふ事なかれ。是聖人の御意なり。福徳を天に預け置ても、損失の氣遣ひなし、能預け所なり。又天より利足を付て下さるとは、律儀に主人大事と勤むる人は、常にはしれねども、何ぞ店持の、聟入養子でもある時、外の人なら隨分宜敷受合の人なりと、主人を始め、外外の者迄もいふ時は、養子聟入など相談ありて、過分の身上に有付事あり。是天より利足を付て下さるなり。常には左のみしれねども、変はといふ時には、天より過分の寶を下さる。是人の與ふるにあらず、天のあたへなり。又なまけ者は常には其樣に目に見へねども、養子聟入の口でもある時、旦那を始め、外々の者迄も、あの人は心元ない、先御世話は出來ぬ、利根にして才覺はあれ共、商賣に實かいらず、又少々ある事もあり、中々此世話は出來にくしといへど、相やめになることもあり。是人が邪魔するにあらず、天より此時罰を當蹴落し玉ふなり。恐ろ敷事也。兎角常に愼んで、商賣家職を勤る時は、福徳

の來る期あるへし。時節を待にしかず、歌に、

咲がしと心の花にいそかるゝ
春のいたらぬ身をしらずして

（以下次號）

最明寺殿教訓百首（二）

福原 菫子 寄贈

人にまして物ねたみする女には
一日もはやく離るゝぞよき

妻のあまりにねみ深き時は、なにゝよらず事に障り多く、其れが爲め家の中とゝのはずして、いろ〱の災難起るものなれど、其心を知らで、早く離別するにしかずとなり、またねたみはわざはひの基ゐなる事を思ひて、女も深く愼しむべきなり。

子をもちてはや年頃を經たりとも
妻には心おけてかたりぞ

總じて女は心淺く、大事をもらかともらすことあり、あるひはあやうきにのぞみて、忽ち心を變ずる事ありて、古今に其ためし多し、又夫婦の間、其初は互に遠慮氣づかひあるによりて、物ごと嗜み愼しむより、賢きものと見ゐたるも、久しくなじみぬれど、氣をゆるし安心だてをなして、日頃のたしなみ愼みもいつしか消うせ、身もち心だてすさまじく取亂して、女の本性をあらはし、終に夫に見かぎらるゝものなり、夫婦の中といへども、親しき中に禮あり、嗜みつゝしむべきなり。

とゞめてもとゞめんものは人の妻の
そゞろに外出なすにぞありける

およそ女は內を脩むるものなれど、已むことを得ざるの外は、閨門の中にくらすべきものなり、然るを

物見遊山を好み、または淫がましき音曲などを聞て、色にそみ香に愛、さして用なきに、かなたこなたと徐に外出する女は、心うかれ氣定まらずして、よからぬ事を爲出だすものなり、或は其心ことなる事なしと雖も、斯る事をしむ〳〵すれど、終にはよからぬものにつきまとはれ、耻を求むる事多し、嚴しく制し止むべき事なり。

賢し顔にさしでゝ語る人の妻は
　はやくも夫に飽れぬるなり

總じて人は、言葉少なく身を卑下して、自慢の心なきを本氣とするなり、殊更人の妻たる者は、穩和にして物事にひかへ愼しむこそ、優しくたのもしからめ、賢顔に利口だてをなして理屈たけく、人をいやしめおのれをたかぶり、氣隨ならんには、夫に見限られん事疑ひある可らず、況して七去の中にも、口まめなるは去ると有るをや。

姿こそみにくかれとて耻なせぞ
　こゝろ言葉を淸くもてれば

たとひ色白く眉目かたちうつくしき女なりとも其心ひがみかたくなゝらば、錦のふくろに糞を包みたるが如くにて、一旦人の目を娯ましむといふとも、終に見落さるべし、又み目かたちわろき女なりとも、心すなほに行ひ正しからば、大布に金を包みたるが如く常坐は男の氣にあはぬやうなれども、後には奥床しくたのもしく思はるゝ事必定なり、古歌に「すがたこそ島のゑびすに似たれども心は花のみやこなりけり」といへり唯人は姿より心なれば顔かたちのけはひは大方にして心言葉をよく〳〵けはひたしなむべき事なり。

わが心鏡にうつるものならば

さてそはかげの見にくかるらめ

人かゞみに向ふ時は、かたちのよしあし明らかなれど、あしきを改たむる事いと易し、心にいたりては形なければ鏡にうつらず。うつるものならんには、其影のむさくきたなく、我ながら耻かしからん、さあらむ速かに改め正すべきものなり。

いたづらに胸のはむらをもやしなど
終に我身をこかすなるらん

人怒り甚だしき時は心を失なひて、理非の差別に暗くなるものなれど、怒に乘じては必ず人を損ふ、我人を損なへど、人又仇を含みて我を損ふ、これ我とわが身を損なふにあらずや、古人も一朝のいかりに我身を忘れて、以て其親に及ぼすは迷ひなり、又怒には、堪へ忍びれさへ止むべし、愼しむべきは怒なり。

人のわれにつらきも人をとがめせで
我身のわろき影とこそしれ

人の惡しき事のみをとがめて、我身を顧ざるはひがことなり、何ぞ人のみ惡からん、我身の惡き故に、其影映るなりと思ひて自ら愼しむべし、孟子の詞に、人を愛してしたはずんど、其仁にかへれ、人を禮して答ずんど、其敬にかへれといへり、人の惡きを見て、我身をかへり見る時は惡きも又我教の鑑となるものなり。

人のうへをいふより科の起るぞと
思ふて口をつゝしめよかし

口はわざはひの門舌はわざはひの根なり、孟子も人の不善をいひて、後のわざはひをいかにせんといへり、人の上をいふは、却て己れをにくみ侮ると同じきなり、惣じて人の惡き事をあぐるは仁の道にあら

ず、然れど聖賢もふかくいましめ給へり。

愚にもわかあやまちを知らぬ身は
終の果こそあやうかりけれ

聖人より下つかたの人に、過失なきはなし。然れども賢人君子は、過失あれど自ら知りて、速に改め直すにより、過失なきに至る、小人愚人は、其過失を自ら知らず、知りても改むる事を憚り、又幸ひに人の告る事あるも、非を飾りて随はず、故に少しの過失も終に大になし、身を亡し家をやぶるに至る、過失て改むるに憚ること勿れとの聖言又尊いかな。

志のぶ草（二）

白松園主人

日頃いたく音曲を好みて、ふるさとにて唱歌うたひしことを、忍びつるなりけり。

あら玉の年たちそめぬ、旅中の悲しさは、とひくる人もなく、よろづにつけて、春の心地だにせず、只々友のもとへ、かくなむよみてつかはしける。

かしのみのひとり子にあらぬはゝそのの
母のみことを一人おきつる

あるふるさとの友が、女の子まうけつるよしをきゝてかくなむ

初春のてうゑひめ松年月に
たちさかゆべき君がかどかな

時は春のはじめなりける。

さて未だ、いくばくも經ぬに、ふと病にそみぬ、只かりそめとのみ、おのれも、自らも思へりしに、次第に重り行きつゝ、さらでだに足らはぬがちの中を、おのれが手ひとつにて、看護と活業とに、心をいらちつゝ、おのれは猶年さへいと若かりけれど、よろ

す便りなく、淺間しう悲しさに、諸共に病みもすべかりしを、重き枕に臥しながら、兄はさまぐに勵まして、をのれに筆をとらせつゝ、假字遣記臆歌といふものをなむ、作りける。こはかねて假字遣の記臆しがたくて、常に心がくる人だに、ふと誤ることの多かるを、歌やうの者につゞりなば、覺え易からんとてものためなり。彼の大森惟仲氏が著はせる、新式音訓假字遣にも、短歌のやうにものせられたれどこれよりひとゝせの前なりけれど、人眞似したるにはあらじかし。さてこれは新体詩やうにものしたり、乃ち左に自序の詞もろともに擧ぐれど。

假字遣記臆歌はしがき

當時文法書に出だせる、假字づかひの法は、紛るべき假字を比べ合せて、其少きかたをを記臆すといふ、極めて簡便の法なることは、世の學者のなべて知れる所なり。されど猶初學の輩には、兎角繁雜にして、記臆になやみがちなるは、己れがよく知れる所なりさるは假字みな單語にして、語と語と相離れたれど、通誦するに道なく、常は皆大方に見過しおきて、事に觸るゝごとに、始めて引きいでゝ見るなり、されど假字遣の書は、今はさながら、字典同樣に見なされて、記臆せる者なきのみならず、記臆せんの心にて、見るものは、稀なるべし。古人はかゝる繁雜にして、記臆し難きものにあへど、輙く歌又は文に綴りて、通誦えたりき。依て今之に倣ひ、試みに此かなづかひの法を、歌に綴りなして、通誦し易からしめ、初學の人の、記臆の便に供へんとす。

上に云へる如く、歌は唯記臆に供するまでなれど、所謂新體詩の体にて、雅粹すべてあらず、且ある限りの語、固より一語も漏すべきにあらねど、前後の連

脈相受けがたくて、意味わかぬ所もあり、誹諧に属する條も多かり、又簡單を旨とすれど、補助語は勉めて用ゐぬやう心しつれど、間々一句補助語のみにて成れるものあり、又本語の重複せる所もあり、されどこは皆止むを得ざるに出でしなり。

例へば、合名詞なる（のわき、野分）、（みさを、水竿）、籌の如きものは都合によりて畧せし所あり（すゑ、陶、末、据）の如きものは、一語にも兼ねしめしもあり、されど此の兼ねたる所には、傍に漢字を一々据ゑて、其意を知らしむ。

本音假字、字音假字の二つを載せて、字音は畧きつ、且つ本音に、清音濁音の題目を、ことさらに掲げ示さず、これ、皆簡單に從へるなり。

今下に和行ゐと、阿行いとの假字を示めす、此外の語は頭は阿行いにして、中下は皆ひぞと心得べし。

ゐなか(田舍)うなゐ(髫髮)が(率)ひきゐたる
　ゐのこ(豕)はゐのしゝ(猪)かみにけり
ゐせき(堰埭)のくわゐ(烏芋)ねをたちて
　ゐで(堰埭)のゐがけ(崩)にゐる(居)ゐもり(蠑)
ゐざる(膝行)かたゐ(乞食)ににたれども
　はらのくれなゐ(呉藍)うるはしさ
くらゐ(位)くもゐ(雲)にたかくして
　とのゐ(宿直)すがたもゐや〳〵し(恭)
にはにあぢさゐ(紫陽花)さきみちて
　いへゐ(家居)かもゐ(鴨居)もたかけれど
たかきとりゐ(神門)のなゐ(地震)まゐる(參)
　あやうきもとゐ(基)ぞまとゐ(團居)すな
ゐ(井)にのぞむよりわれそろしや「
　こぎかへすべきかい(櫂)もなし
くい(悔)てかへらぬわがれ(老)いの

むくいはこゝにさいづちを
かしらにうけてうせなまし
左に和行のゑと、也行のゐとを示めさん、此の外に
ある詞は、頭にあるときは、阿行及び也行のゐにて
中下は皆へぞと心得べし。
ゑかきがゑぜるにしきゑの
ゑくぼゑましきかほばせに
ゑみてもにくしゑとりがは
ゑたとよばれてくやみつゝ
なほこそゑぐれゑぶくろの
ふくれがちなるこのごろは
うゑをわすれて今さらに
ゑふてはゑぐし舌のすゑ
まはらぬこゑをはにわけて
しばるゑばしはふづくゑに

すゑものつくるゑんぢゆかげ
こずゑうちきりつゑにつき
れはぢねりゆくわかまな子
はやゆゑづきぬきのふまで
ゑんだれひつるれさなでが
うゑしこの身をおとにして」
いりゐのさゞゐ小川のはゐ
しづゐにひゐどりあそぶなり
ひゐくふとりはにはけれど
ぬゐはなにをかくふならむ
そののどぶゐをいとはしゝ
そのものゝふのきたりける
ころものいろはひこたゐの
もゐぎなりけんいざしらず
くるまのながゐなかゝに

　　ひさしくなりぬ今よりは

左に和行のを、阿行のれを示めさん、此外の語にて、頭にあるときは阿行れにて、中下にあるときは、皆ほどと心得べし。

をすなあげたるたをやめの
　　みさをはいだもこなむいと
かをるをんなのをしへぐさ
　　をとめをみならなんなども
えをりつゝゆくみちもせに
　　しをれがちなるをみなへし
をれむこぼるゝえらつゆを
　　のするはせをはいろあをし
えをにをむなをとりませて
　　さしたるをけにみづたゝへ
をしものいそぐあさなゆふな

一　をとゝしのとしをとつひの日
をえのちぎりをむすびそめ
　　いへををさまれどねがふなる
こゝろのひまはとるをさの
　　をさ／＼わらじ何時も
をゝとをなしてつかへつゝ
　　うみをいいとのうみもせじ
をゝしきをとこのかたいへむ
　　をのこをのこゝをひにをぢ
をのを荷ひてつゞらをり
　　やをらこゑくるをかをのへ
をちこちみわたすをちかたに
　　をめくはむえのをさといふ
をろちのこゑかをしやこの
　　いのちとられてせんなしと

をのゝぎ（慴）つゝもふしをがむ（拝）
　かみにたすけをよぶこぞり
をかし（可笑）やつねはをこ（怠）たりて
　いまはのをり（折）にをこ（愚、戯）のもの
をり（檻）にいりぬる身ならねど
　こゝにいのちををは（終）らずも
にぐるにしかじをさな（稚）しや
　とを（十）にもたらぬをさなご（幼子）の
さを（竿）をさゝげていを（魚）ゝつる
　そのいを（魚）をなにぞかつをひを（堅魚、氷魚）
しろを（白魚）をとびを（飛魚）をとをそ（獺）のかは
　をしか（章）はきなすいさを（勲功）をゝむ
をこ（嗚呼）がましくなをご（驕）りそよ
　きんせいをかし（犯）はせざりしか

‖わとは‖のまぎるゝは、語（ことば）の中（なか）と下（しも）とに限（かぎ）るなり、左（さ）に擧（あ）ぐるわの‖外（ほか）は、皆（みな）はぞと心得（こゝろえ）べし。

のわき（野分）のかぜも身にしまず
　ふるあわ（泡）ゆき（雪）もさぶからず
こわづかひ（聲遣）さへさわ（爽）やかに
　こわだか（聲高）〳〵にのりさわぐ（騒）
いわけ（幼稚）なかりし時すぎぬ
　おもきたわら（俵）もかろらかに
しわざ（作業）ちはやき時すぎぬ
　たわやめ（美女）なせるおもかげも
しわみ（皺）〳〵てくわゐ（烏芋）なす
　ますぐきこしもくつわ（轡）なす
まがりたわみ（撓）てかよわ（弱）しや
　うらわ（浦曲）のあまがとるいわし（鰯）
みづかわ（乾）けれどよわ（弱）りゆき
　みなわ（水泡）吹きだしたわ（撓）〳〵に

そのはらわた（腸）のくされては
　ゆわう（硫黄）のいろかかぎつけて
ひわ（鶸）がついむむさま見ては
　あわつる（惶）わまもことわり（理）や

佐行のじと、他行のぢと、よくまぎる、下にわげたる佐行じの外の語は、語の上中下に係らず、皆他行ぢぞと心得べし。

つむじ（飈）のかせにもましろがず（脆）
　くじけ（拆）たゆまぬつらだましひ
まなじり（眦）見はりのりなじる（詰）
　そのいきほひにたじろく（避易）てき
はじ（櫨）のれはゆみうち切りて
　やじり（鏃）なげすてふみにじる（蹂躙）
うなじ（項）のちしはすさまじ（荒涼）や
　くじる（抉）まなこをつまはじき（爪弾）

うじ（蛆）とれなじき（同）やつこらが
　なをなまじひにむさぼり（慾）て
くびをしゞめ（縮）てふりかざし
　いむかふこゝろのいみじ（甚）さよ
かくつぶやしきそのかみの
　なにがしむらじ（連）の後にして
名はふじ（富士）よりもなほたかき
　ひじり（聖人）とひとによばれたる
あるじ（主）のとじ（刀自）があるじ（饗）ぶり
　かたじけな（忝）みてうけいたゞく
あじか（簣）のうへにさらしたる
　ほじゝ（脯）にひじき（鹿尾菜）うちまじへ（雑）
さしたるさじ（匙）のみじか（短）くも
　しゞみ（蜆）にはじかみ（薑）きじ（雉子）ひつじ（羊）
くじか（麞）、むじな（狢）のかはごろも

きてもかじくる（憔悴）れいの身の
つじかせ（辻風）さむしつじぎみ（辻君）が
まじなふ（禁厭）くじ（籤）のさちありて
あらはれいでしろらのにじ（虹）
あまのかはらのあじろぎ（網代木）に
ながれかゝりしいはつゝじ（躑躅）
いはでももじ（文字）にいちじるし（著）
いまにはじめ（始）ぬものいはじ（不）

佐行のず‖と他行のづ‖とまぎる、下にわけたる佐行ず‖の外は、皆他行のづ‖と心得べし。

なりはず（鳴弭）のおとすゞ（鈴）のおと
すゞしき（涼）かげにたゝずみて（佇立）
すゞむし（鈴虫）のねうちきけど
くずのした（葛葉）をくゞるもず（鵙）
すゞめ（雀）はらひてのねすみ（野鼠）と
あらそうみゝず（蚯蚓）かず〳〵の
きず（疵）つけられてうせにけり
のべのあなたのいちにうる
すゞき（鱸）をずさ（従者）にかはせしに
いをはかはず（不）てくさのなの
すゞきたをりてかへりけり
いかにとゝへどいらへせず（不）
すゞり（硯）いだせどものいはず（不）

（記臆歌をはり）

かくて、春もいつしか暮れて、夏も半になりける頃兄の病はいよ〳〵重り行きつゝ、おのれうせなば、骨を持ちかへれよといふをこの世の終りにて、廿五といふ年に、遂に空しくなりぬ。彼の肺といふ、おそろしき病なりと聞きければ、癒ゆまじとは思ひつれども、さばかり早うとは、かけてもおもはざりけり。

なからむ後の母を思ひ、又おのれのことをさへ、いかにわびしう思ひつゞけて、心細かりけんと、今も袖の上露けし。

（をはり）

雨夜燈

扶草禰磨

（三）山賤の狂詠

阿波の國なる祖谷山近き邊にまつ源といへる人ありけり、此人わる口をいひてにくまれものなり。或日、山の人の來りけるが、其姿様の異様を見て、

夏冬がいつ所に來たかやまの人
　したにぬのこに上にかたびら

かくいへるに、山の人とりあへず

夜晝が一所に來たか且那どん
　片眼つぶつて片眼おきてる

とかへしければ、しれものゝまつ源、物もいはず、この人片眼盲たるを山人のあざけりし事のおもしよさよと、其國人のわれにかたりき。

（番外）郭公の古聲

まへにあげたる阿州祖谷山の阿佐某が事は、この燈のつらに留めたりしには有らで、春夜朧月の蔭にまぎれて、大からずも、三のかげにうつしとられたるなり、されど文章も文字もさだかならぬがいとをはかり、殊更にしるしたるにあらざれどあやしきふしは見ゆるしたまへかし。

東臺墨堤の花もはやちりすぎて、若葉に色、日一日にみどりをそふるをりしも、おもはざる方よりとはくちかくのなのり出ぬるは郭公の古聲なり。

祖谷山の深きこすゑのほどゝきす
　あさくはきかじたゞにはきかじ

阿佐家系圖

これは阿佐家の正孫なる阿佐松藏君の所藏せるもの。君は當時市下神田橋本町養徳學校々長の職にあり。

桓武天皇第五王子
一品式部卿葛原親王九代後
刑部卿忠盛四男
門脇宰相中納言
教盛門脇宰相從二位中納言
　長門國檀浦赤間關入水
通盛從三位越前守攝津國一
谷生田森湊川之下見田瀧口
時員ト討死
女子
國盛從四位越後守壽永元曆之頃讃岐八島合戰以來
阿陽大山打越元曆二年十二月晦日同國祖谷山大枝
庄領主討破同山阿佐庄引籠承元二年四月四日逝去
法名定福寺殿前越州從四位敷眞順照尊儀號忠盛中
納言律師武藏國ヱ配流教經從五位上能登守長門國
檀浦赤間關ニテ討死入水
業盛藏人大夫攝津國一谷ニテ土屋五郎重行ト組討
死
教子宗盛室

女ニ修明院母
氏盛
國盛嫡子小次郎後守阿國祖谷阿佐ニテ建長二年六
月二日卒法名號慈覺阿殿清岩秀岸大居士
盛之小七郎後隼人ト號同谷大枝之庄安住
女子
業辰小一郎後藏人ト號
女子
氏盛嫡男
盛時小次郎後阿佐越後守則在名爲假名號德二二曆
二月十日逝法名春光玉照
國盛二男
忠盛小八郎後槐之頭祖谷山久保庄安住
女子
女子
盛時嫡子
家盛小次郎後阿佐紀伊守ト號
康安五年八月二日卒法名秋
道號紹寒
二
盛安小三郎後藏人ト號同谷栗枝渡庄安住
三
貞盛爛四郎同谷奥ノ井庄住
女子

家盛長男
盛辰阿佐樵之頭後肥前守ト號永享十一年三月五日
卒法名清雲道號淨菴
二
業家小五郎
三
盛能樵次郎
盛辰嫡子
盛鎮阿佐紀伊守文安五年十二月十七日祖谷山阿佐
ニテ卒法名冬月道號淨寿
二
末盛樵三郎
三
重盛樵四郎
女子
盛鎮嫡子
盛實阿佐兵衛後佐渡守ト號永正五暦八月三日板東
鎗場合戰ニテ討死ス死骸三好郡金丸長善寺葬ス法
名皈雲淨祐禪定門ト號
盛實嫡子
盛光阿佐左衛門後肥前守ト號
天文十一年七月八日卒法名圓智院華散居士
吉門五郎同三郎
盛光嫡子
盛深阿佐越後守元龜三年十月二十日卒法名悦蓮院
宗遊居士
盛深嫡子
盛次阿佐紀伊守元和二年九月十二日祖谷阿佐庄ニ
而卒法名月山淨金居士
家正同彌太郎
吉定同彌七郎土佐國行路ノ庄ニ住家重同四郎兵衛
後阿佐紀伊守ト號
盛次之三男阿佐小一郎永祿元年三好郡井ノ内谷村
エ移住ス元和三年巳十一月十一日卒法名大空院往
背念居士
正辰同中左衛門祖谷樫尾庄ニ安住ス正辰永祿三年
修驗宗ニ入
天台宗千八百二十一ヶ寺
聖護院宮末寺　　愛行院　號免

北の海路

石榑千亦

第十信

十五日午前十時二十分有志者にれくられ、例の汽車にて札幌に來り、例の宿に入る。道廳にものして、小

樽のなりゆきを報告す。訪ふ人いとさはにて、くさ〴〵の話おもしろし。中にも渡邊氏とのことゞひは北海道のありさまを見るにたるべけれど、こゝにかかぐ。

問ひに曰く、小樽と室蘭と何故にかく様を異にするや、農場もあり、山林もあり、炭礦もあるに、いかで其さかゆるとあらぬと、さばかり異なるや。

答に曰く、町人が富の程度の異なればなり。

又とふ、室蘭に交通の機關そなはり、人も船も馬も車もそなはりたらむには、函館にいづるにも便あしきにあらず、小樽よりも近し。さては内地に日々流船便などあらむには、必ず面目を改めむとおもふはいかに。

又答ふ、否、そは望むべからぬなり。船をはじめ交通の機關そなはるべくもあらず。備はりたりとて小樽には及ぶべくもあらず。今現に夕張炭山はかなたに近けれど、その半は遠き小樽におくり出さる。それにても思ふべし。

又々とふ、されどそは一は早く備はり、一は備はらざるによるものならむ。さては人ありて思ひこゝに至らむいかでならざらむ。

又々答ふ、そは早きおそきによりてにはあらず。もし備へむと思ふものあらむ、あやまりなり。西海岸は海産にとめり。海産は無盡藏なり。見よ、東海岸の貧しくして、西海岸の富める事。いかで陸のみによりて、さまでに進みさまでにおくるべきや。

とふ人曰く、まことに然り。今はじめてさとりぬ。まことに小樽の盛にして室蘭の及ばぬをしりぬ。北海道は大かた海をもて成れる國なれば。

兩地の優劣思ひやるに足るべし。さても鐵道全通す

れど、東海岸には良港なし。必ず未來望あるは室蘭ならむ。

夜市街をそゞろありきす。いと廣き道に大きなる家みな都として見るに足るべきもの。停車場前わづかのほどは、銀座通の如く、列よく樹木など植付たれど、その他はなし。われはすべての速かにかくならむことを望む。さて人のゆく道、馬車の通ふ路と初めよりとゝのひたるが、など馬車の一つもなきならむ。官衙學校會社病院勸工場演劇場果物屋野菜屋などくさぐさあれど、理髪店の大きなると多きとにくらべては、みな劣る心地す。内地にても見ることを得ぬは、思ふに理髪店なるべし。遊廓も地にあはせてはと思ふ斗の區域をたもち、こゝにあるを舊見番といひ、藝妓町のを新見番といふとか、其數も思ひやらる。熊にあらず、狼にあらず、骨なよゝかなる野郎の多きにはあらぬかど、例の他事ながら憤ろしく候。十五日發於札幌

第十一信

十六日八時廿分例の出たつ。今朝ことに風さむく、雨身にしむ。白き物さへ交れり。

あゝ別は名のみ也けり此あした
まだきに霙ふるを思へど

蝦夷島、もとよりせまき野もなけれど、

雲ふかく閉かさなりて時雨ふる
野幌の原は果なかりけり

道のべのけしき、

往さには薄き紅葉も見えたりき
幾入霜の日々にそめけむ

わが歸らむとするに、汝はわれをしひてゆかむとするに似たり。

もみぢ葉の袂にちるは都へと
　思たちたるこずゑなる覧
遠く他郷にものしぬ。またもわれ尺寸の功なし。せめて、
都路へかへるためとの淋しさに
　かざしていなむ木々の錦を
江別、なほ風も雨もやまず。
風さえてけさ川水のこほりけむ
　散し木の葉の動きだにせぬ
梢をまらぬ木の葉は散りてまへり。
風のむだ峯のもみぢの亂るらし
　見れど果なき枯蘆の上に
幌向のわたり、神やいますとかしこみけむ。
大方はきり開きつる田の面にも
　實ならぬ大木猶殘りけり

切株の多きは、やゝ昔の面影を見るに足る。まして少し奥まりたる處は、みなその朽つるをまつなりとか。はやく鐵道をひきて、運びいでまほし。つくれど家屋ともなり、浮寶ともなるべきよき木の、とく〳〵朽ちなむことを祈るとは、内地の人の忍びぬことなりかし。こゝの人はいはく、
山祇に末ともとゝを奉りをきて
　殘れる寶せむすべぞなき
岩見澤はいとよく開けて家も多く田畠のみなり。
岩見澤むかしの名殘名にとめて
　新ばり小田も年ふりに鳧
翠と紅と彩色をきはめたる繪の如し
熊笹のおひしげりたる岡の上に
　紅葉のにしき清まふの里
山はいぶせきまでにおひこもれり。

紅葉は雲井にたかしくりやまの
　端山奥山しげやまにして

由仁驛。

見渡せど由仁の林にあめはれて
　韓くれなゐの雲ぞ殘れる

三川驛。

いつのまに夢の懸橋かけわたし
　三川の里もしらで過けむ

北海道にては、水夫に追分の俚歌をきくを、樂隊にも藝人にもまさりておもしろしとす。その鬼の如き口より、糸の如く殆きれて僅につながれる美しき聲をもて歌ひいづれは、わが魂はしらず〱あくがるる心地す。さてもかゝる奥まりたる方に其名をとゞめつるはいかに、唯名にあらはしたる追分といふ意ならむよし。さてもこの島にては、さしもあらじ。

あらうみの波をわけ來て舟人は
　山路をさへに開初めけむ

早來と追分との間の小山、あるは高くあるは低く、みな丸々とこねたり。築山なれどとて、かくまでにならむは、幾十百年か經ずてはと思はる。

芝れふる小山つゞきに庭木なす
　紅葉常盤木面しろきかな

早來にて土人下りたり。髮も髯もふさ〱として、肩より胸に被へり。其美しさいはひかたなし。或人いはく、この種族はいかにも毛多し。生れて幾度か剃りけむなどいへど、ある人は、彼はその器なけれど、一度もそりしことなきなりといふ。さまでひらけぬにかといへど、北見などにゆけど、鼻のさきまで生ひたるがあり。固より年だにしらず。甚しきは、清淨もしらねど汚濁もしらず。賢もなけれど愚も

なく、教育もなければ衛生もあるべくもあらず。さても其熊にむかひての力は驚くばかり也。銃にてうちそこなふ時は、直に飛つきてすまひ、山刀もて、腹といはず首といはずさしとほして捕ふ。其組打に度々勝を得つるものは、推されて首領となる。されど一つ面しろきは、土人の女と内地の男と婚ひてなしたる女子は美しく、血色もよく髪も黒く、もとより身体も極めて健やかに、質によき兒となるなり。これをメノコといふ。いかに、アイヌ婦人を望む君はなきや、メノコはなどいふに、車ゆすりて打わらふ。

苫小牧。

時のまに又かき曇り海人のすむ
　里わさびしく時雨降来ぬ

疎らなるあまの苫屋の軒端より
　つゞきやすらむ沖の海原

白老の里にて、めづらしう雪のいたくつもれる山を見る。

名をきけどしる人もなしいかに降て
　山の頭のゆきとなりけむ

敷生。

限なき豊あしはらをいとはやも
　水穂の國と打ひらかなむ

登別。

石あかく水は黒しわきいづる
　出湯の里をみな上にして

幌別。

何處より冬をへだてし野も山も
　未だもみづる色なかり鳬

輪西。

紅葉はまだそめねども晴くもり

定めなき空に時雨ふる也

室蘭。

海原は靜かにすみてわがのらむ

今宵の舟の安げなるかな

四時丸一旅館に入り、夕餐したゝめて、田子の浦丸に入りぬ。十一時出帆の定めなれど、空合あしければとていでず。誠にこゝの海にもこまりしもの也。船のあしきにもあらざるべけれど、船長のよからぬにもあらざるべけれど。けふは停車場の名を記しおかむ料に、必ず一つゞゝこぢつけぬ。今はその儘去るして、けふの文に代ふ

十六日夜船のいでぬに困じはてゝ、

田子の浦丸より。

執心（一）

蓬生屋女史

雪舟が執心

すきこそ物の上手なれとて、畫を以て其名を世に知られたる雪舟は、姓は小田氏にて、備中赤濱の人なり。十二三歲のころ、其父攜へ寶福寺に投じて、一僧の弟子となしけるが、雪舟幼きより畫を好み、山水をうつす事をのみ好みて、經卷を事とせざるに、師の僧しば〳〵之を誡めけれど、雪舟はなほ巳が業とせざるに、師の僧いたく之を患ひ、此上はきびしくこらさんものとて、一日堂上にのぼせ、柱にくゝりつけて、食をも與へず、ひねもす身動きもならぬやうなしおきたるに、その日の夕ぐれ、師の僧今はこりしならん、且つ如何ばかりよわりし事と今はあはれにさへなりて、自ら堂上に至り、繩索を解かん

とするに、雪舟が膝下に大なる鼠走り出でたり。師の僧大におどろき、思はず飛びのきけるが、如何にも雪舟にかみつかんさまなるに、又や雪舟をきずつけん事をおそれ、ありあふ棒をおつとり、之を逐ひしかど、鼠は少しも動搖せず、さてはとて鼠のどう中めがけてしたゝかにうちけれど、手にこたふるものもなし。いとあやしみ、近うよりて見けるに、こは、そも、眞の鼠にあらずして、雪舟ひねもす愁苦に堪へざりし涙痕、堂に滿ちて、板敷に鼠を畫きけるに、あたかもよし、日來つもりをりし塵、墨もてかきたる如く、其勢恰かも生きたる鼠の奔走の体に似たりけるにて、師の僧は再びおどろき、遂に其妙に服し、それより後は畫く事を戒めずなりしと云ふ。かゝる愁苦の中にもなほ思ひがけたる道を忘れざりし執心のほど、やがて長じて、遂に畵を以て世にとなへられたり。



笠子笑談集

金津常十郎

大小無極

日本の馬、みづからわが身を大きなりとし、もはや我國に於て及ぶ物なし、是より入唐して形くらべせむやと思ひ、遠きもろこしにわたりて、かなたこなた歩行く内、高山の峯より一聲雷の如くうなりて、風の如くかけ來るものあるゆゑ、仰て是を見れば、其形大いにして、惣毛黄色に黑き班毛あり、針金の如き髭左右にわかれ、口中紅をそゝぎたるが如し、眼は光ありて長き尾あり、いかなるものと云事をしらず、其物忽ち眼をいからし呼で曰、わが前に來るは何らのものぞ、馬大きに恐れ、跪きて申けるは、われは日本の馬にて候、我國に於てわが形に及ぶものあらざるゆゑ、此國に渡りてかたちくらべ致さんと存じ、是までまゐりしが、今貴殿の形を見れば、我より大きなり。そも御名を承りたしと云ければ、彼のもの笑て曰、汝知らずや、われは是唐土の虎なり、此廣き國へ來りて形くらべなどゝは、先もつて形より氣が大きな、早々是より歸れと云ければ、馬は大きにはづかしく、おづおづ云けるは、扨も〳〵大きなる虎殿かな、定て此國にて貴殿にまさるものはあるまじと問へば、虎頭をふりて曰、汝は小國に生れて己が形を大きなりと思ひ、此處に來りてたま〳〵我形を見て大きなる物とするなり。汝かの象をしらずや、馬おとがいをたれて驚て云、然らばまだ貴殿より大きなる物ありや、ねがはくは此地へわたりし面目に、其象殿と近づきになりたしといへば、虎即象の居る所を教へけるゆゑ、それ〳〵行て見るに、是は又虎とちがひ、其大きさ山の如し、象にて

〳〵と笑ふて曰、來るは何物ぞ、馬答て曰、われは日本の馬なるが、先ほど虎殿に逢て形の大きなるに驚きしに、猶貴殿の大きなる事を聞きしゆゑ我國へ歸り後學の爲にもとぞんじ參たる由云けれど、象鼻をならして曰、汝なほわれを大きなるとするか、馬の曰然り、もはや貴殿より大きなる物はあるまじ、象が云、扨々ちひさな事を云ものかな汝かの鯤馬といふ物をしらずや、馬驚て曰、あゝ貴殿よりまだ大きなるものありや、象がいはくわが、形を何十倍といふ事をしらず、馬又云、然らばその鯤馬より大なる物はもはやあるまじ、象耳をふりて答て曰、鵬牛といふものあり、其蹄の間よく彼鯤馬をかくす、爰に於て馬大息つきて歎じて曰、われはじめはわが形より大きなる物はあらじと思ひしが、今は又我形より小なる物はなし、誠に大きなる物は終に盡くべからず。さらば、是より我國へ歸らんと急ぎけるが、日をへて日本へ戻りて見れば、居る程の生類皆我形よりちひさし其ちひさき物より亦ちひさきあり、それより亦復ちひさきものあり、其大きなるも終に限なく、また小なるも終に限なし。爰に在てはわれを大とし、彼處に在てはわれを小とす、あゝ何をか大とし何をか小とせん。

註に曰、人々見る所の大なる物を以て大とし、見る所の小なる物を小とす、又見ざる所の物に因て大小の變ずることを知らず、只大小は物二ッ對して其時の暫の名にして、其大となす物を大と定て置きがたく、其小となす物も小と定て置きがたしたとへば、犬と猫と對しては犬を大とし猫を小とす、又其大とする、犬と牛と比れは其大とする所の犬は却て小となりて牛は大となる、扨又先に小と

する猫と鼠と比れば、其小とせし猫は却て大となりて鼠は小となる、故に大を捨て極らず、小を求て極りなし實に是一つのものにて大小の定りたる名なければなり。善惡も亦然り、善人も惡人も、天は曾て「カマヒ」なされず、如何となれば、善惡大小の類皆人事に付たる名なればなり、天は只無心自然にして萬物をなす、善人には福をあたへ、惡人には禍するなど云ちひさな私事の世話はなされぬなり。然れども、人と生れたら、私事であらうと、人の拵へた法に從はねばならぬなり。此理を能得心せざれば、彼賢人の伯夷や叔齊が餓死したり、盗跖と云大賊が生長して福一生有て終たり、或は顔回と云善人が夭死したりする道理はわからぬなり。一扁に云と、天は善に禍し惡に福すと云ても急度云はるゝなり、是も取ぞこなひすると彼斷無の見になるから、此所を能々翫味すべきなり。

昔の聖賢の人々が了見に、色々人事の教を拵へられたれども、或は過となり、或は不及にて六箇しき事あり。其内孔子一人こそ、堯舜の道を見付出して萬民を教へ玉ひたるなれ。是人事の中を取りし教へしゆゑ、彼過不及の患なし、誠に最上の教なり。

梅の下風

白魚女史

第一回

享保の先きつとし、正德の頃かとよ。越後國柏原の宿に森田屋とて、主人が名を銀五郎と呼び、所に名高き旅宿屋あり。同じ柏原宿に軒をならべ、棟をつらね、旅籠屋のあまたあるが中に、此家は搆へも壯大にて、久しき家なりければ、越路へ往きかふ人の

よろしききは、大方此家をたづねて泊りけれど、下男下女あまた召しつかひて、家もいと榮え、お専といふ子寶さへもちて何の不足もなかりけるが、十五夜の月は見る〳〵かげ安う、冬ごもり、一年妻なる人、ふと風の心地にたれこめてより、春の行方もしらま弓、霞にふかく閉ぢこもりけり。お専、時に年やう〳〵六つ、七つ、まだ春淺きみどりの子のおぼろげながら母の病の心にかゝりおのづから野邊の遊びもおもしろからず、共にたれこめて、母が枕邊にはひまつはる蝴蝶の袖のしほらしきに、母は悲しさにえ堪へず、やつれし手にふり分けの髮かきなでつゝ、ちと野に行きてすみれ摘みこよ。此のごろはお花さんも、お梅さんもとはずなりたるが、早う誘ひて、ちと遊びこよと、苦痛の中にも子をいとはしみ慰めむとする母の心のあはれなるに、やさしうされては、何となく涙こぼるゝ習ひ、お専は子心ながら、母がかいなでの手のいとゞ身にしみて、何となく涙ぐまれ、いよ〳〵母の枕邊はなれがたく、顔を振りて、母さまがなほられではと云ひつゝ、わけなくわつとむせびかへるぞ、おのづからなる恩愛の涙なる母もいよ〳〵かなしう涙さそはれ、糸の手の思はず力さへ出でゝ、娘が手を取り、病床に引き入れてしかと抱きしめ、又一しきりふる涙より外に答へむ言の葉も出でざりき。

あなや此中に、母さまとねたりなど、世話やかしては、母樣のやまひはなほらず、早く他へ出て遊びこられよと、藥箱片手に入り來る醫師の言葉に、母親もなみだを拭ひ、早う遊びこよ、母さんもうちきなほれなとて、抱きしめし手はまたとみに彈力失せて、よわりかへりしでむの如く、おのづからゆるみ



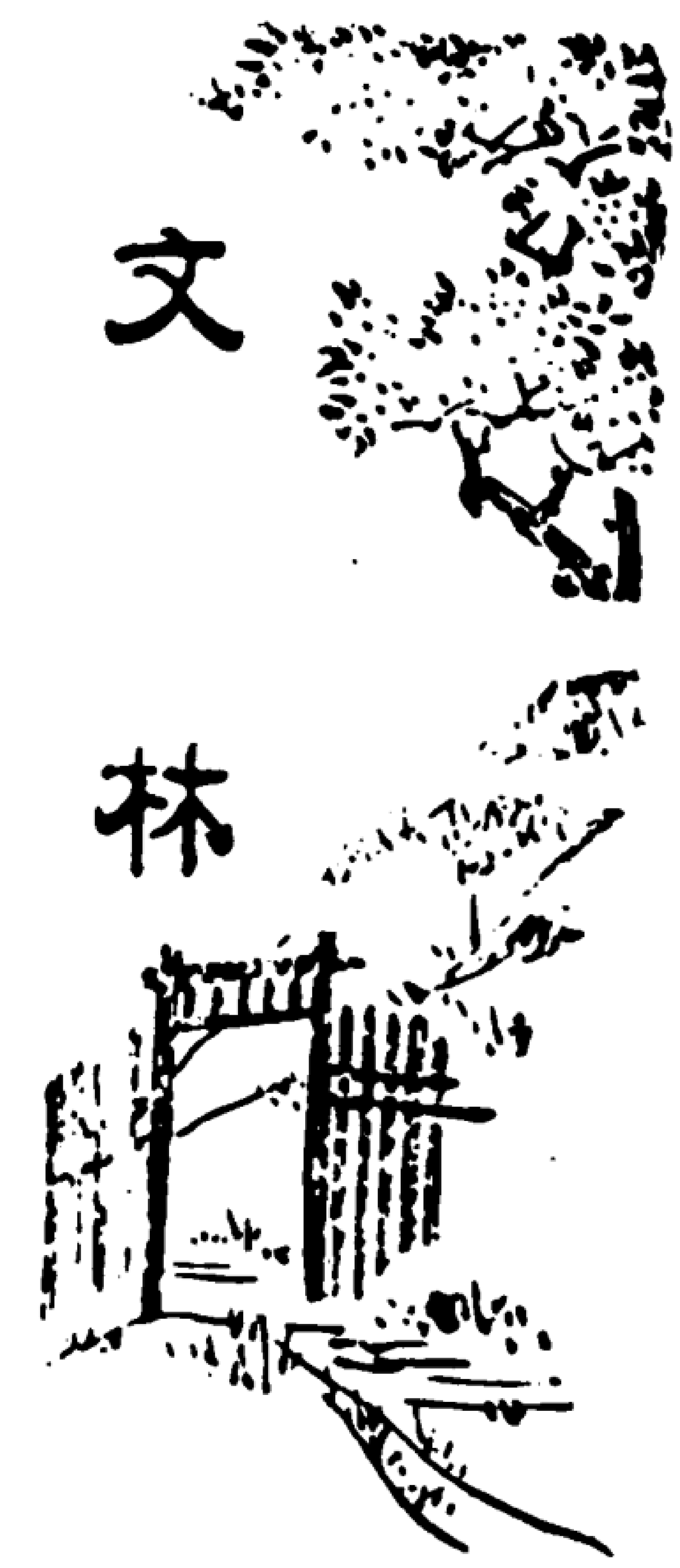
はてぬるも、いと〳〵心細し。なほるなら、そんなら遊びこん。早くおつくを呑むで留守のまに母さんなほつてよ。きつとよとて、子兒心のわけなく人の言葉を信とし、花ちやん、みいちやんを誘ひけるに、これも珍らしき思ひして、お母さんのおわむぜいがなほつたの、わら遊ぶとなはつて、など、右と左に取りまきて、何時もよりは中よく、人の氣を措くもをかし、あすこのれんげが一番きれいよ。お專さんつんで上げましやうか。此處へいらつしやいよ。お專さんよ、お專さん〳〵と、外に人なき如く人々もてなす中にも、お專は兎角母をおもふ心らせず、もう母樣はなほつたかしら、歸つて見やうかしら、あんまり早いとなほりきらないといけないはなど、つぶやくにや、相談するにや、折り〳〵音をたてをりしが、空飛ぶ鳥の聲に俄にれんげをほうりだし、もういゝは、烏が歸へるからとて、別れもつげで、すた〳〵とかけ出すに、お專さん、どうしたの、まつていらつしやいよ。あんまりねとて、皆々夕立のあとゆく雲の追ふ如く一同驅け出すに、犬までが共に追ひかくるもをかし。

母樣もうなほつて、まだとて、なほ替らぬ顏を見て、うちしめるもいと哀れなり。黄金にも玉にもかへ難き子が、遊びざかりをとめもせぬに引きこもりて、母親が顏をのみ守り居るは、よく〳〵母を慕ふ子心はやく全愈しなむ如何によろこびむ、花の盛りに野につれだつ事あらむ如何にうれしからむなど、已が苦痛の去らん日よりは早く子をよろこびさん日を數へつゝ、十日たゝぬ、廿日も過ぎぬとまてども、春霞み、ひとり去り行きて、病はなほ愈えず。はては醫師をもかへ、彼方の祈禱、此方の加持と、夏引、

手引の糸の手を盡くして介抱すれど、いとよわりゆくのみ心細さの日に〳〵まさり行くに、今はとても、世につながれむ玉の緒ならず、明日にも我が命終らむ、彼の娘は何とせむ、如何になげかん、後は如何なる後妻の來りて、いとしの兒をいかなる者もとに苦るしむる事ぞと、未來を想像する眼のうちには、早く知りもせぬ後妻の姿のいぢわろげにうつり、娘が泣くさま見えてえも堪へず、うつゝながら聲あげて泣くに、娘もおろ〳〵になりて、どこが痛き、母樣さすりて上げむとて、小さき手もて肩なづるに、母はいよ〳〵え堪へず、坊、此處へ、〳〵、世話やかすと母さまがなほらぬからいやと、かはいの子や、〳〵、此の子をおきて何處へ行かれう、何處へ行かれやう、御前を抱きしとて、母さまがわろくも成らえむ、また、〳〵とて、むせびかへるに、娘もすべり入りて、たゞ泣くばかり、母は聲も絕え〳〵娘が黒髮をなづるも力なく〳〵、あはれ此の黒髮の延びむ、自ら根高くそろひ上げんものと、日比たのしみしに、悲しや、のう、せむ、母樣は御身が丈けの延びるを待つことは叶はず、明日にも露とならんも計られず。母なき後は父さまにやさしう、大人しうして、後の母さまのこられなむ、此の母と思ひて、何事もすなほにせよ。先の母樣など夢にも云はるゝなよと、云ふもたえ〳〵、またむせかへりて、わつとばかり、親子愛着の涙、空に通ひて、軒端にそゝぐさみだれに、血を吐く時鳥の聲、いとあはれなり。



文林



霞中雲雀　　久我建通

霞みつゝすかたは消えてかた岡の
あしたの原にひはりなくなり

庵春雨　　鍋島直大

ひとりすむ宿さひしくそ覺えける
更てきこゆるはるさめのおと

春雨晴　　高崎正風

うら〳〵と日はてりなからすゝ菜畑
烟るやあめのなこりなるらん

望遠帆　　長岡護美

浦遠くこきゆくまゝにいそやまの
まつよりたかくなる帆かけ哉

朝春雨　　竹屋光昭

はなみんと契りし友もこしものを
雨になりたるあさほらけかな

岡花　　諏訪忠元

久方のくものうへ野のをかの邊は
花さきしよりひとそたえせぬ

水上落花　　宮地巖夫

さくらちる木の下かけの池みれは
水にもきえぬゆきはありけり

行路花　　小出粲

とひてこし道の追わけゆきすきぬ
並木のはなのかけにうかれて

花宴　　植松有經

日くるれは月も匂ひてはなかけの

うたけいよいよおもしろき哉

春夢　鎌田正夫

夢さめてむかし忍へははるのよの
あかつきかたもねふられぬ哉

土筆　岩崎勝従

少女子か袖にあまれるつくつくし
つみし野へこそ聞まほしけれ

春の歌の中に　足立正枝

からねこのつまとふこゑも哀にて
あめにふけゆく春の夜半かな

河上春月　伊藤純三

はるの夜は高瀬の川のつきかけも
けむりのすゑにかすみける哉

竹　石原均

生出てゝすなほにみゆる竹の子の
すゑは千尋のかげとなるらん

春日長　安齋篤敬

青柳のいとにくらへんあつさゆみ
春のひかけのなかきこゝろを

朝顔日記といふ浄瑠璃を聞きて　木庭芳香

あさかほのつゆの情をいのちにて
しほれはてたる身そ哀れなる

河蛙　鍋島榮子

花くもりあめにやならんさと川に
くるゝもまたてかはつ鳴なり

蛙　前田朗子

こゝよりも生まさりけん池の面の
蛙のこゑのかしましきかな

花見ありきて　西四辻茂子

日毎ゆくところかはれとさくら花
　あかぬいろ香はひとつなり鳬

里春月　南郷柳子

眞柴たく里のけふりやそひぬらん
　いよいよかすむはるの夜の月

夕春雨　松平健子

つれつれとかき鳴したる琴の音に
　霞むゆふへのあめをこそ志れ

夕蛙　小笠原艶子

夕月よほのかにうかふかきつ田の
　みつかけ見ねてかはつ鳴なり

折花贈人　原田蕓生子

軍ひとにこのひと枝をれくりてん
　花もみもあるいさをたてよと

春駒　田中竹子

若こまのいなゝく聲はさやかにて
　かけはのかにもかすむのへ哉

山吹露深　服部磯子

山ふきの八重も一重もこのあさけ
　ねたもたわゝに露そむすへる

樵路躑躅　河村重子

そまひとかかへる薪にをりそへて
　夕日まはゆきにつゝしのはな

深夜春雨　土岐いく子

みし夢ははかなくさめて更る夜の
　まくら靜かにはるさめのふる

折藤花　安東翦子

たをるとも人な咎めそれのつから
　ゆかしの色のふちのはなふさ

雨中柳　柴田靜榮子

うちけふるつゝみの柳かけきゐて
　入江さびしきはるのあめかな

竹を愛る歌

海上壽子

世の中のうき節しらで　かきこもる窓のむら竹
ひと本はみ掉にとりて　れいが身の心なぐさに
朝〳〵つりやたれまし　一ふしは笛にをきりて
れいが身の心すさびに　夕べ〳〵吹やならさむ
かにかくに思ふものから　れむかしき竹にし有ば
しかすがに切はあたらし　生立てゝ正しきふしを
立のひて直きすがたを　歌によみゑにも寫して
むらきもの心のともと　めではやさまし

竹を愛る言葉

藤井行麿

晉騎兵參軍王子猷栽稱ニ此君。唐太子賓客白樂天愛爲ニ吾友ト といへりしはうべなりけり。木にもあらず、草にもあらず、ひとり異ものにして、竿のほど〳〵に節をまもりて、みさをすぐなる竹ばかりめでたきものはあらずなん。すべら吾大御國にも、神の御世よりとり〳〵あなるが上に、そのかみ、呉といへりし國よりもて渡りしを、人みな珍らしみ、くれたけとたゞへられしが、いつしか竹のすべ名のやうにもなりにたり。後また、明といへりしころ、から國よりわたりしは、大明竹とよばれて、文人にめでられたり、そのしなとり〳〵にあなれど、なべてさつきの頃、なにばかりの日數もあらず、さゝと生ひ立ち、たけたるものにしあれば、たけといふ名は負ひそめけん。みなつきのてりはためく日にも、三冬月降つむ雪にも色變へずして、うきふしを堪へ、うれしき千代の年月を重ね、すぐなるを己か性にて、立榮ゆ行く此君は、唐も大和も、いにしへ今、猶ゆくすゑも、

世々長きみやひの友にこそ。



雜報

●大御惠　去月十五日、富山縣東礪波郡井波町及び同郡城端町に火災あり、人民窮困の趣　かしこくも　天聽に達し、　兩陛下より金五百圓を下し賜ひて之をにぎはし給ふ。厚き大御心の程こそいと畏こけれ。

●貴婦人園遊會　さる五日、芝離宮の御苑に、内外貴婦人の園遊會を催されたり。御來集の方々は、皇族を始め奉り、各國公使、勅奏任官等の各夫人方にして、猶當日は、　皇后陛下より、特に一同へ、立食の御饗を賜はりしといふ。

●宮中歌御會　本月の御兼題詠進は左の如しと承る。

首夏月

芦垣のしたり柳も葉になりてなつにかゝれる三日月のかけ　正風
櫻花にほひし松の木のまより夏しりかほの月のかけかな　建通
繁りあふ若葉の上にいてなからなほ月影はうち霞みつゝ　直大
つゆひかるわかはなつかし夕月よ心や夏にまつうつるらん　豐穎
木々は皆若葉になりて山のはの月さやかなる夏はきにけり　利嗣
生出したけのわかはに月さして軒端すゝしき夏はきにけり　承昭
ほのみゆるかけもすゝしき夕月のわかはの露に宿りける哉　經
花も木もなへてみさりになりにけりすゝしく匂ふ夕月の影　顯允
夏きぬと霞もいつかきえはてゝはや三日月の影はほのめく　最衡
山のはのかすみもけふははれそめて夏こそきたれ夕月の影　公正
花はまたちり殘れとも庭の面にさす月かけは夏めきにけり　光昭
繁りあふわかはをもれてさす月の光すゝしき夏はきにけり　忠敬
ちりはてし花のなこりやしたふらん青葉の露に月の宿れる　濟
ほとゝきすはつれきゝつる夕より月の光もなつめきけにり　美稻
夏もふ春のなこりにかすむらんほのかにみゆる夕月の影　通治
さきそむる卯花かきにてりそひてなつはちしろき月の影哉　雅之
夏きぬとかけしわかはのゆふしてに光をそふ月よみの神　有卿
ふく風にいさひしはなはちりはてゝ若葉に匂ふゆふ月の影　長延
天の原かすみはきえて夕月の影もいつしかなつめきにけり　最弘
梢みな緑になりてこよひよりなつめきにける月のかけかな　任子

しらかしの梢露ちるこのまよりかすまぬ月の影はさしける　文子

水枝さすはひろかしはにさす月の光すゝしき夏はきにけり　祥子

大そらの霞はきえて水はさすこのますゝしく月そもりくる　貞子

夕月夜かすかになりて葉かくれに殘れる花もみゆるには哉　數子

卯の花もさかぬ垣根にてる月の光ははやくなつめきにけり　道子

わかさゝの竹のわかはをもる月の光すゝしき夏はきにけり　絲子

夏衣きかへてみれは大空のつきもかすみをいてにけるかな　いさ子

みつはさす木々の梢もつめきてすゝしくみゆる月の影哉　好子

竹の子の若葉さしそふのきはより涼しき月の影そもりくる　鉦子

花ちりてわかはさしそふ梢にもなほかすみける月のかけ哉　いさ雄

水枝さすわかはの上にてる月のひかり涼しくなれるころ哉　三枝

おしなへて緑になりしなつ山にいてたる月のかけの涼しさ　愛

きのふまてかすみし月も此ゝさやかにみえて夏はきにけり　嚴夫

ちり殘る花のこの間の夕月夜なつのひかりになり初にけり　正臣

霞みたつ春はすきしなけふもなほ影おほろけにみゆる月哉　同

風わたるならのはこしの月影に動きそめたるなつけしき哉　秋香

端居にはまた寒けれとわかはもる影なつかしき夏のよの月　同

我宿の青葉のかけはくらけれと月のくまなき夏はきにけり　有經

花の雲たなひきゝえてかたをかのわかはさやけき月の影哉　嚴雄

わかはさすこすゑの露にこの夕かすまぬ月に影そやされる　長吉

影はまたへたてぬほとは夏木立わかはに匂ふ月のすゝしさ　有義

わかはふく小風はいまたさむけれと夏の光になれる月かな　錫二

むらさめにぬれしわかはの露みえて月の光も夏めきにけり　正夫

藤の花ちりうかひたる池水にかすまぬ月のかけそうつれる　胤明

水枝さす梢のつゆに影みえて月のひかりもなつめきにけり　英一

昨日こそ春はくれしかしらかしのみつはさやけき夕月の影　森清

花のくもはれし梢にてる月のかけさかにも夏はきにけり　久子

◉奇特　山梨縣に住む雈川友吉の祖母いねといふは、今年九十年六ヶ月の老媼なるが、身体頗る強健にして猶矍鑠たり。このたび、一切人手を藉らずして白絹を織り上げ、畏こき邊りへ献納せんとて、専ら其の事に餘念なしといふ。

◉婦人報效義會に入る　兵庫縣但馬國美方郡村岡町士族美濃部リン(二十五)兵庫縣播摩國佐用郡乃井野村士族塚田アサ(二十)大坂市南區高津町三番町林ウタ(三十)廣島縣備後尾の道字上新町村上トシ(十六)兵庫縣津名郡千草村字小百非矢代ヨネ(十九)京都府紀伊郡東九條藤田すゑ(二十)の六名は、各父兄の許諾を得て報效義會に入り、既に同會員川口甲助氏に伴はれて占守島に向ひたり。婦人にして同會に入りしは之を以て

始となすと。

●義婦　福島縣、安達郡、小濱村、大字下長折の人、國分浩氏の家母は、年齒今は五十なるが、平生家道を整へ、兒子を撫育し、家聲大に擧る。殊に婦人にして大體の理に通じ、頗る國事を憂ひ、常に子弟に訓ふる處あり。而して、常に、同縣撰出代議士、安部井磐根翁の、國事を切念し、且、其の德行鄕土に鳴るを見聞して、深く翁を信賴し、安部井翁は、國家の爲め大切の人なれど、唯、翁の議員となりて、國事に盡力せられんことをはかるは、我等撰擧區民の勤むべき事なりとて、朝夕神前に酒饌を供へて、專ら翁の當撰を祈念し居たりしに、翁が此度當撰せしを聞くや、平生の念願叶へりとて、いと喜びて、赤飯を炊きて神前に供へ、尙、翁平生赤飯を好むときゝて、之を重詰とし、去る三月十七日の朝、積雪二尺にも餘りて、寒風骨に徹する中を、僕一人にかの重詰を負はしめ、二里餘の山路を踏みて、翁が二本松の私宅を訪ひ、さて、妾は、下長折の國分浩が母なり。此回翁の當撰せしを祝し、且、深く國の爲めに盡されんことを請ひ、其の勞辛萬分一の御禮をも聞え上げんとて、かくは參りたり。面會を賜はれといひ入れたるに、翁も、未だ一面識なき人なれども、此の積雪の中を態々の訪問、志のほど辱けなしとて、請じて內に入れ、妻女をして慇ろに之を慰めしめしに、かの老婦は、平日より、翁の國事を憂ふるを以て深く尊信せしよしを述べ、且、今回の當撰は、誠に國家の爲め喜びに堪へず、之を祝し、合せて老年にして山海跋渉、辛艱國事に當らるゝことを謝するが爲め、聊か志の一端を表する印として、赤飯を炊き、平日の報賽のために神前に供へたれど、尙、翁

の一饗を煩はさむやと、切望の餘り持參せりとて、撲に負はしめし重詰を出したりしに、妻女も其の心根の親切なるに感じ、つぶさに其のよしを翁に語りしに、翁も大に之を感じ、今日屈強の男子にして猶國恩を忘れ、私利をのみ營むの際、僻邑の一老婦にして、かく義を信ずること厚しとは、ほど〱感に堪へざるなり。志の程も受納し、態々の來訪を謝せんとて、即ち翁の居間に請せしが、誠に撲實なる老婦にして、居行閑正、應答禮義誠に厚く、翁の前にては、始終手を席に着け、頭を垂れて、敬意言貌に顯はれたり。翁は態々尋ね來られし親切を謝し、さて語るゝは、予は老衰物の役にも立つべしとは思はず、されども、六十余年の國恩、いさゝかも疎かには思はす、寤寐の間も切に國事を思ふは、今も昔も變りはなし。しかれども、予よりれこがましく名のり出でゝ當撰を得んなどとは思ひもよらざりしが、郷土の人々、此の數日間、業を休み、勞を辭せず、雪中寒風の間を東西に奔走せられし心の程は、誠に予に過分のことにて、心に謝する處なりしが、人皆の志徹底して、かく當撰せしからは、たとへ斃るゝとも辭する念なし。老年の微兵と心得て、此の上も、及ぶかぎり國家の爲に盡さんと思ふなり。特に態々尋ね來られしのみか、厚き賜物をも惠まれたる上は、猶更心力のあらん限り盡力する決心なれど、懇に陳べしに、老婦は始終頭を垂れ、涙を流して之を聞き居たりしが、稍面を上げて、御志のほど誠にかしこし、數ならぬ我が心をもくみたまひ老年をも厭はず國家の爲め盡力したまはんとは、かへすぐも冥加のことにこそ。これにて平日の祈願も達したりとて、誠意面に顯はれたるに、翁も感じ

て暗涙を流せり。さて、かの赤飯を賞玩せんとて、夫妻相並び、老婦と同席して數杯を食し、其の佳味を賞しけれど、老婦は、不味物をかく賞せらるゝは分外なりとて喜べり。件翁夫妻は、種々に饗應して、四方山の物語などするに、老婦の喜び此の上もなし、時過ぎて後、辭して家路に就きたりとなむ。偶々尋ね來りし同郷の有志者某に此の談を傳へしに、某もいたく感じて、更に知る人に尋ねしに、果して平生より、深く翁の赤誠國に盡さるゝ人なるを信じ、神を祈念する毎に翁の當撰を祈り居りしとなり。現に今回撰擧の際にも、有志者、翁の爲めに奔走せんとするに當り、運動費の缺乏を憂ふるを聞き、老婦は人々を勵まして曰く、運動費の爲めに、翁の當撰せざるが如きことありては、誠に御國の爲め歎かはしきことなり。夫は、自身一個にても、如何にもして辨ずべけれど、心おかず盡力せらるべしとて種々奔走周旋し、數百圓を調達して、之を助力したりしかど、人氣もひとしほ引立たりしなりと聞き、翁も、益々老婦の義俠心に感じ。婦人にてすら國事を切念すること此の如し。目下の危勢に當て、何ぞ志士の放念空々に過すべき時ならんやとて、決然閑廬を出で、今や東都にありて、專ら對外同志者の先輩に推され周旋最も盡力さるゝとなん。一村邑の婦女にして、能く堂々たる國士を感奮興起せしむるに至る。世間良家の妻女子達よ。此の義婦人の行爲に鑑み、家に居ては家政を調へ、子弟を撫育し、外にしては夫の足らざるを助け、以て妻の模範、母の標準とならんことを努められよ。

●孝女　山形縣米澤の士族に竹澤やをといふあり。性至孝にして、其の父病めるを看護すること玆

に十年、實に一日の如く、嘗て倦怠の色なく、且善く家を理めて一族を安んず。縣知事聞きて賞狀を賜ひ、其の至孝を旌表せりといふ。

●姉妹は何故に親しむか　下野の國瑞穗尋常小學校の女生徒富山ふき子、天性孝順にして、晝間學校より歸りし後は、弟・妹を守りてうち親しみ、夜間は學科を復習して怠らず。或る日教師ふき子に問ひけるは、妹姉は何故に親しむべきかと。ふき子いふ、姉妹は病氣困難の折抔、互に相あはれみ相たすくべきものなれば親しまざるべからずと。兄弟墻に鬩ぐの輩、聞きて將に愧死すべし。

●うれしき子　あり、廣島縣渡某の女、名をいつといふ、年廿歲。常に祖母父母に仕ふることまめやかにして、性柔順なり。自ら乞ひて筆職人となり金三十圓を貯へ、之を祖母父母に獻じて京都見物をすゝめたりと。近頃世は驕りに傾きて、子女は大方虛飾に大金を擲つなかに、かゝることを聞くはいとうれし。

●けなげの兄弟　あり、鹿兒島縣大島郡德之島山間切花德尋常小學校の四年生にて仕義啓といふ、今年十三歲なるが、不幸にして、天性、兩眼常人の如く明かにものを見る能はず、足もかよわくして、口も思ふがまゝに音聲を發する能はず、手も不自由にて、辛うじて左もて用を辨じ、只健全なるは耳のみなり。しかるに、此の子、學術はなか〳〵に不具ならず、常に優等にて同級中の首席に居り、能く他生の及ぶものなかりしが、此の程優等を以て尋常全科を卒業したりと。さて、此の義啓の弟に利里とて今年十一歲になれるあり。今尋常科三年生なり。義啓の未だ卒業せざりし程は、共に同校に通學し居た

りしが、利里は兄の不幸をかなしみて、辨當其他書籍石盤等の如きは、皆自ら引うけて持ち、又兄の足疲れたらん折は、脊負ひなどして行きけるに、兄もいとゞ弟の親切に感じ、家に歸りては途中の介抱に報いんとて、心を盡して弟が知らざるを敎へ、以て之を勵まし、互に相扶助する其の友愛孝悌の情の厚き、父母は更なり、近隣のもの皆涙を流して感じあへりしが、事縣知事に聞え、兄弟の善行を賞して、兄には家庭敎育歷史譜本一部、弟には近江聖人一冊、理科遊戲一冊を與へたりといふ。

●女學校の遠足運動　江州大津町の高等女學校にては、十五六歳以上、二十三四歳までの生徒を引きつれて、近日伊勢參宮を試むるといふ。

●世界の最年長者　は、佛蘭西ハウテマリー縣のアウベリー村に住むマリーツーランといふ婦人なりと。此の婦人、今年は百三十八歳の高壽に達せるが、猶元氣なか／＼盛にして、兩頰に皺のあともなし、又、此の婦人能くナポレオン第一世を知り、常に其の人となりを人に語るといふ。

●奇緣　十九歳の女子、七十歳の老爺を慕ひて妻となりしもの越前に在りて、七十九歳にして廿五歳の嫁を迎へしものは岐阜にあり。ねうなけれど、聞きて漏らすもあたらしければ筆のついでに記す。

●怪しききこえ　を耳にせり信乎。宮城縣尋常師範學校附屬小學校にて、此の程生徒を募集せしが、なかには百餘名の女生徒あり、高等科に入るものゝ内には、既におとなびたるもあらんに、悉くその女子を全く裸体となして身体撿査をなせしに、中には驚きて逃げかへりしものもありしといふ。女子の身体撿査吾人は強て之を惡しゝとはいはず。然れども、

之を爲さんには、可然方法もあらん。全く裸體となすとは何事ぞや、怪しきことにこそ。

●阿波國上山村村長　は、義太夫節を以て有名の人なるが、頃日吏員と共に主唱者となり、高等小學校の男女生徒を集めて、三日間演劇を催したりと。歎かはしいかな、かゝる村長ありて、教育の普及せざる亦宜なり。

●歎ずべし　いふまじと思へど今日のあつさ哉とは、よく夏日のありさまをうがてり。こゝに亦、かゝる事がらもいふまじと思へども、さてもあまじけれどなり。『神戸に在留する南京人の外姿には、廣島縣人、十が八を占めたり。金だに得れど、義をも思はず、不潔も、恥辱も、顧みず。かゝる輩は、性質支那人に類すれどなり。』とその新聞に見えたり。なは國中、外人の數となれるもの其の數幾許ぞ。由來神州血統を尙ひ、節義を重ず。而して、忝くも純然たる天神の血統をうけながら、之を外人にけがす。これ我が身の貴き知らざれどなり。如斯にして、兒を擧ぐれた、即ち私生兒として、我が子とす。其の兒果して、純然たる日本魂を具するを得べきか、しむらく疑を容れざるを得ず。さて卅二年後なほ滔々として、かく身を忘れ、義に背くものあらんには、遂に大に憂ふべく、悔ゆべきものあらん。歎ぜざらんと欲すれども、豈得べけんや。今や、大に國風を宣揚して、世界のしこ草をも打なびかしむべきに、却りて、我先づ彼になびく、何等の醜体ぞ。かのすぎし、『ふるあめりかに袖はぬらさじ』の歌を思へ。嗚呼歎ずべく、憂ふべき限ならずや。何としてか、之を救ふを得べき。



五月廿日兼題　農夫

天　横濱市太田町二千二百三番地　笹子茂子

あしはらの瑞穂の國と名に負へは
　田子こそ國のたからなりけれ

地　山形縣山形市新築　岡田陽子

けふは田をあすは畑をと賤の身は
　たかやす業にいとなかるらん

人　伊豫國松山市鐵炮町十八番戸　野中あさ子

賤しとて何かうとまん小田つくる
　たみはたふとき國のもとゐそ

秀逸　（十五首）

田に畠になるれはなれて賤の男は　佳山幾子
　うらやすけくも世を渡るなり

雨にぬれ日にさらされて賤の男か　田代艶子
　いとなむ業やくるしかるらん

田に畑にいそしむ人やあしはらの　名取よ志子
　みつほの國のもとゐなるらむ

なかなかに心そやすき田にはたに　武藤いね子
　くはとる業を世わたりにして

みかとへにまつる貢となつもの　宇高松子
　いたつきつくるみ民たふとし

冬のあさ夏のひるまも田にはたに　山井すみ子
　いたつく賤やいかにわひしき

幾秋のたり穂のいしねつみをさめ　柳島ゆき子
　うらやすけにも見ゆる賤かな

をたかへす賤のをのこの手業こそ　森永巳巳子
　み國をとますはしめなりけれ

賤の男と人はいふともこゝろして　西艶子
　たはみたからのなにな背きそ

なりはひの多き中にもみたからの　清水すみ子
　すきとるわさのたのもしき哉

みなひとの命とたのむわさ取れは　塙いさむ子
　大みたからとうへもいひけむ

すきくはをとらぬ暇のなけれはや
すぎ渡る世のゆたけかるらん　玉井隆子

田に畑にいそしむ民のあれはこそ
みつほの國もさかえゆくなれ　仲田しけ子

すき鍬をとる身は玉にあらねとも
國のひかりはこれよりそてる　三幣操子

すき鍬をあさな夕なのともとして
くらすも安ししつか世わたり　林久子

（以下原稿到着順）

賤しけに見ゆれとくにのもとゐなる
田つくるわさそたふとかりける　高橋きむ子

神代よりおほみたからさたゝへあけ
田子のすかたそゆたにみえける　佐々小琴子

はらつゝみうちてそ遊ふ田ひと等は
みのりゆたけき御代をいはひて　佐々有鄰子

千町田にうゑにしいねはみのりけり
かりとるわさそいそかしけなる　堤彬子

すきくはにちからをこめてひと筋に
かせくをあきのたのみにはして　溝口貞子

すきくはゝ取りてたかへす賤とへも
御くにのことはわすれさりけり　田代綾子

賤の男は身におふわさと小やま田の
からきつとめもいとはざるらん　石井豐子

やつかほの足穂のいねのみのりをは
たのしみつゝも世をおくるらん　畠山百合子

なくはもてつくりし畝はすみなはの
たくみにうちもおとらさりけり　畠山千代子

大きみにさゝけんもののこしつのをは
こゝろつくして田をやつくれる　高井孟子

鍬かまのほかにはふてもゆみやかも
よらて世わたる身こそやすけれ　永井さい子

田に畑にくはとるしつのなかりせは
よものたみくさいかてしけらん　金森さし子

日にやかれ雨にはぬるゝしつのをの
わさそみくにのもとゐなりける　山根久子

ひとすちに秋のみのりをたのみつゝ
さるやまくはゆうらやすけなる　尼立さみ子

千まち田にさなへうゑつけこん秋の
みのりたのしむ身こそやすけれ　徳永萬壽子

しつのをかこゝろのこまにむち打て
くにいへさますわさそたのしき　澤田春子

鍬さらぬ日はなけれとも田にはたに
世わたりやすくみねにけるかな　野口信子

ふる雨もときをたかへぬみよなれは
しつのしわさややすけかるらん　横山柳子

さしあらむ秋のたのみをしつのをか
　なはしろ小田につまおろすなり　長松かれ子

ひれもすに鋤さりたはたすきかへす
　たみそみくにのたからなりける　奈賀井満梨子

早苗さろころにもなれはしつの男か
　ころものそてはかわくまそなき　萩原章子

千五百あき瑞穗のくにはかみよより
　おほみたからそたのみなりける　遠藤眞久子

賤の男か田つくるわさは世のなかの
　ひとのいのちのたのみなりけり　遠藤雪子

賤の夫か老いもわかきもうちつさひ
　わめきさやきて早苗さろ見ゆ　石井信惠子

人はみなおのかたのもにいてはてゝ
　しつかいへ居はひろそさひしき　下元もさ子

世の人のたまの緒にこうしつのをか
　いたつきなかせあせのしつくを　杉山綠子

しつの男は稻のはなみて來むあきの
　みのりまつろやいかにたのしき　重松たか子

年ことにおほみたからのふに行くも
　たゝくろしつのいさをなりけり　近藤よし子

つちかひてつくれろいねをすめ神に
　そなへまつろもたみのいさをそ　二宮春枝子

さわかしき浮世をよそにあしひきの
　やまたもろ身そのさけかりける　濱さみ子

世のなかをはなれて里にすむたみも
　うきはのかれす田はたうつなり　宇高靜子

をこたらす小田もろ賤そやかてまた
　すめら御くにをまもるなりける　片桐ひさ子

賤か男のあさなゆふなにくさきりて
　たのみうれしきあきを見ろかな　池田みさを子

朝はさくゆふへはおそくいたつけろ
　田子の手わさにならへもろひと　竹村竹里子

朝な夕なあらたにつくすこゝろこそ
　やかてやつかのほにも出つらめ　淺谷いく子

しづの男かさ苗さろらしぬれぬれて
　うたふ田うたのこゑきこゆなり　六鹿旋子

天つちにまかせおきつゝたはたけを
　たかやすわさのみこそやすけれ　矢島すみを子

夏の日にあせをなかしてはたらかは
　かひや見ゆらむ秋のほのうへに　堀口しき子

民くさのつとめたかやすしろしこそ
　あきのほの上にあらはろゝなれ　倉田寶子

田にはたにかへすくもあけくれに
　しつのわさこそたふとかりけれ　清水かつら子

春の日にあささくおきてしつのをか
　あらたたかやす見ろもたのもし　田代まきよ子

賤のをかはろのたにいてたかやすは
　あきのみのりのあれはなろらん　藤澤まきの子

はるの田のつちうちかへしく〱　いなたねおろすころそたのしき　唐澤ひて子

春の田をかへすく〱もしつの男は　あきのみのりをこゝろかくらん　小池かすゑ子

賤かをはあさとくおきてくはかたけ　たうたうたひていさみたかやす　桑澤しけり子

秋のたのかりほのいねのおほかれと　いさみたかやすしつかをのこら　市川よね子

賤のをかあせみつなかすしるしこそ　ほにあらはれてあきは見ゆらめ　那須やすゑ子

苗しろにたねまきそむるときよりそ　あきのみのりをみなねかふなる　大槻まつね子

田をつくりうしおふ子らのあせ水は　くにをさむるもとゐなりけり　山田琮子

あさゆふに田畑をともとすきひとは　としのみのりのうれしかるらん　佐藤喜代子

たかきやのたかきめくみは今もしる　けふりにきはふみよのしつのを　内本道子

いとまなやみ草かりつゝうまかひて　かりほすいねをはこふしつのを　藤村たみ子

賤のをかひことたかやすきくはに　くにもあまねくすきわたるかな　浦井豐子

おほ神のさつけたまひしゆたねをは　よゝにつたふるたみそこのたみ　浦井澄子

せきいるゝ水ほの國のしつのわさに　あめかしたくさうるほひにけり　浦井清子

將さへ知らぬおきなもかへすかへす　たかやすときはたかへさりけり　太田淑子

いくさせかたかやす道に老いし身も　鳴る子のなはをなほまもりつゝ　太田とき子

しつやしつしつとしいへと國のたみ　つくるは田子のちからなりけり　笹子貞子

月をふみほしをかさしてしつの子か　たかやす小田にこかねさくらん　笹子みつる子

賤かをのてにとるくははひのもとの　たからをつくるためにこそあれ　中島まつ子

植ゑはてし千町のさなへみてそ思ふ　このころしつやいかにいとなき　仲田榮子

かゝしかさまつみらるゝは賤の男の　みのきて小田に立てるなりけり　柳田里子

露にぬれ日にこかれつゝしつの男の　手わさいとなきさまあはれなり　池谷富子

ゆたかなる田はたのまゝに賤の男か　こゝろつくしのしられけるかな　中桐杏子

しつの男のこゝろつくしは稻くさの　ほにあらはるゝときそしらるゝ　舘脇ます子

ひるのみか夜のへ手わさに賤の男か　わらうつおとのきこえくるかな　晉斐ちか子

くたかけのこゑにさめつゝ賤の男か
　あさつくりするさまあはれなり　戸塚てつ子

天の戸の明けぬくれぬとしつの男か
　田はたいとなむこゝろやさしも　諸井久良子

大きみにつくすこゝろのしつのをか
　田うちながらに御代うたふなり　押元兼子

皆ひとかあきはわひしとかこてとも
　田つくりのみはまちわたるらん　押元さかゑ子

すき鍬をとるみはわさのいやしくも
　くにのもとゐはこのわさにこそ　押元定子

しつの男か鍬をかたにしみちすから
　わか田に植ゆるさなへをそ見る　北原季子

時くれは田つくりひとはおくれしと
　ともにきそひてさなへとるなり　福原菫子

田に畑にすきとり出てゝしつの男か
　わさいそしむもみなくにのため　高砂き代子

時しあるあめをいのりてしつの男は
　なはしろ小田にゆたねまくなり　高須奈菊代子

世につくす道はかはらししつのをか
　としあるあきをいのるこゝろも　名取正代子

田にはたに鍬とるわさもくにのため
　つくすこゝろはかはらさりけり　坂田きみ子

思ひやる小田におりたちるなへくさ
　いとなむわさのしけきしつのを　失名

天かしたおほみたからの名に負へは
　世をやすかれと御田つくるなり　吉田すみ子

いとまなき賤もこゝろにたのしきは
　あきのみのりをまてはなりけり　仁保しま子

つるきたち身もたなしらに御民らか
　ときおくれしとさなへとるなり　大橋芳子

早苗とるしつかたもとのぬるゝまて
　めくみのつゆのしけきみよかな　氣賀すみ子

日にくろみ雨にさらされしつの男か
　たかやすみれはいとゝかしこし　靑木たま子

たまの緒を繋くもとはとたつぬれは
　くにのたからの農夫なりけり　山内蔦子

鍬とりて世をわたるなるしつの男は
　あきのみのりやいのちなるらむ　目黒佐喜子

春あきのなかめをよそにすきくはを
　とるや御くにのもとのたみくさ　林あさ子

田もはたもおひたちよしと賤の男か
　みのりをまつはいかにたのしき　朝倉八眞子

おのか身のつかれいとはぬ賤の男は
　すなはちくにのもとゐなりけり　木下菊子

昼にいて星にかへりて身のつかれ
　いとはすはたのはなしなりけり　堀賀多子

荒小田をすきはしめにしその日より
　みつほのあきをまちわたるかな　中田豊子

夏ごとにおなしかど田のなへとりて
ゆたけきあきないくかさぬらん　羽室象子

あせ水にまとふつゝれはかわかねと
たのしかるらん田子のこゝろは　賀屋壽子

雪なふみあめにそほちてはたに田に
つちかひつゝもとしなふるかな　岡澤のぶ子

世のひとも大御たからとあふくなる
みつほのくにのたみは此のたみ　大友倫子

八束穗にわたりゆたけきこのあきな
くにのしろしと見んひとやたれ　杉村貞子

鍬とりていやしきわさなすとても
きよきはしつのこゝろなりけり　坂井みつぎ子

ちりのよをいそしみいそむ驗ありて
たのしくすこすしつのたみかな　楠花雄子

田に畠にしめなははへていぬるかな
かみのめくみにしけるたみくさ　樋野りよう子

ゆたかなる君か御代をはうたひつゝ
かさたううなりさとのしつのを　三好梨花子

さくらはなにほへる春も來むあきの
みのりにこゝろかゝろなるらむ　服部峯子

田に畠にくはとるわさはつらけれと
世をさけてこそこゝろやすけれ　岸なみ子

あら小田をかへすしくもうつくはに
やまとしまれのとみやますらん　皆川清子

君かためくにのためにとしつの男か
田のもにいそくさみたれのころ　岸田はつ子

ものゝふさまはかはれと劣らめや
やまたをつくるしつかいきほも　三輪榮子

雨かせもなにかいとはんたつくりの
しわさもくにのためとおもへは　山崎さく子

雨の日もはたかせのひもおこたらて
田つくるわさそくにのもとなる　外川錠子

こん秋のみのりをかけてゆたねまく
しつか田わさそいそかしけなる　阿保松子

五月廿日兼題　人に別る

天　千葉縣安房郡豐田村沓見　三幣みさを子

世の中に、別れ、といふことなからましかば、如何にうれしからまし、とたもふに、わふは別れの始とかや、世の諺に、きゝつるこそ、いとも〳〵あさましけれ。されど、開けゆくこの大御代に、生れしからに、いつも〳〵、父母の許にのみ、廿ねをるべきかは。まいて、女は、ゆくすゑ一家をとゝのへ、子女を敎へ導く、重きつとめをさへ負へれど、一たびは、世の憂さつらさも、ねこゝろみでは、かなはぬ身に

しあれど、親に別れ、友どちに別れ、物學に赴くは、さるべきことわりながら、日頃、わりなく睦びかはせる中らひは、いとゞ別れのをしまれて、あはれに悲しきものになん、ある日の夕つかた、姉とも妹とも頼みこし、花子の君とひ來て、こたび、父母のゆるしを得て、物學の爲め、しるべあるまゝに、東京なる某女學校に、物せむといふ。いととみのことゝて、兎角のいらへもせで、只あきるゝばかりなりしが、ふと心つきて、思ふやう、そが心を勵まして、勇ましくうち立たすべきを、さはなくて、めゝしくふるまひぬるこそ、いといと本意なけれ。いでや、別れのまとゐせむ、と思ふかぎり、くさ〴〵の物とり出でゝ、夜ひと夜、名殘をゝしみて、今よりは、月花の折を過さで、消息おこせてよ。雁の鳴きわたる秋の夕、木の葉窓をうつ冬の夜ごとに、いかに戀しうなつかしからむ、など、うち語ふほど、はや東の空、白みそめたれど、さらばとて、袂をわかちぬるに、折しも、有明の月、山の端にかくろひて、今一たび、見まくほしけれど、いとおぼろげにて、あやにくなりや。

地

甲府市山田町　名取正代子

假初の三日五日の程だにも、別となれどかなしきを、まして、いつあふべしとも定め難き長のわかれ、いかでかかなしからざらむ。あはれ、かへりみすれど、あひ見てしより、茲に八年の春秋、同じ窓に物學して、起きふしを共にし、出づるに入るに、しばしもはなるゝことなく、朝には文の理をあげつらひ、夕にはかたみに故郷のさまなど語りあひつゝ、花の匂ひ、月の光、めでたしといひては互によろこび、あはれといひては互にかなしみ、恰もひとつ心なるが如くなりき。然るに今や學の業のをはりたれど、君は都にとゞまり給ひ、おのれは西の國のはてにおもむかんとす、公のさし定めらるゝ所、何かはこばみいなむべき。さはさりながら、長の年月、親はらからもたゞならぬ斗り、むつみ來りし君に、別れまゐらせんこと、なか〴〵にかなしうて、涙せきあへず。さりとて、いかにせんかたもなければ、思ひあきらめて、あすは袂を分つことゝなりぬ。あな、あはれ、あはれ、君もいよよまめやかに、學の道のおくがをきはめ給へや、おのれも、力の及ばん限り、つとめはげ

みて、尊き我師の御恩にむくい奉らん。衛雨のあした、風の夕、よろづに心し給ひてよ。又道の程は、遠くとも、近うたよりをきかせ給ひてとよ。あなかしこ。

人

筑前國筑紫郡住吉村住吉五番丁　林　久子

親よに、別てふことはいとわびしき物はあらじかし。此はらからはいふもさらにて、むつましき人々とは、世のかぎり、たのしく暮さまほしなどおもふも、いかでか此かなしびをのがれん。されど、かりそめの別としいへど、またうれしくあふ折もあめれど、かぎりの別こそ、またなくかなしき物なりけれ。あはれ、世にわかれてふ事のなかりせば、いかにたのしくのどけからまし、などおもへど、かひなきをいかにせん。

たゞ別といふ題ならんにはいとめでたかるべけれど人に別るといふ題には少し合はぬふしあれば入位とす。

（以下原稿到着順）

奈賀井　滿梨子

逢ふをよろこび別るゝをかなしむは、なべてかはることなからむも、親しみ深きものゝ別れは、殊更にたへがたくぞ覺ゆる。わが日頃師とも、姉ともしたひ參らする某のきみは、幼なきころより學の道を好み春の日もながしとせず、秋の夜もみじかしとのみ思ひて、いそしみ勉められけるが、こたびは又その道の奥かな極めさせ給はむとて、東の都へ物し玉ふときゝ、いとむねふたがりぬ。さるは、春べは打つれて諏訪山に花かざしもち、夏の夕べはたもとつらねて湊川邊にすゞしき風を追ひ、秋たてば海べにそゞろあるきして澄みわたる空の月をながめ、冬は時ならぬ花をながめつゝ、共にいにしへ今の事どもかたりあひなどして、心あさからず、誠のはらからの如くしたしみ睦みつるに、今山川遠くへだてなばかりそめの別れとは思へど、さすがに名殘のをしまるゝになん。殘る我身は茅渟がうらべにとゞまりて、夢にのみ見るは昔が面かげぞと思へは、今の別ぞやるせなき。あはれ、此後は、路はるけき地とはいへ、もとのよしみわすれ玉はで、月花の折々につけて、御音づれ給はらん事を、ひとへにねぎ上げ奉るになむ。

宇高　靜子

春べは、手をたづさへて、上野あすか山あたりの花をながめ、夏の夕は、袂つられて、すゞしき川のほとりに螢を追ひ、秋立てば、瀧の川などに、紅葉の錦着てかへる道すがら、さゝわたる川なばなかめ、冬は、時ならぬ花をながめつゝ、ともに火桶をかこみて、今むかしのわかちなく、語り合ひなどしつるを、いまははる〳〵海路を越にこせ給ひ、南の空に立ちゆき給はんことの、名殘惜しさよ。獨のこれるわが身は、いとゞつれなく悲しうてなむ。思へば、今のわかれぞやるかたなき。あはれ、汐路はるけき地とはいへ、花のあした月の夕のをり〳〵には、御消息をたまへかし。いまよりしきりに

れぎまつるになむ。

佐藤喜代子

若紫のすり衣、袂ゆたかにたち別るれど、此袂にも包まれず、嬉しきものは、あはれ此日なり。古き世より、君が館と妾が家とは隣して、行きかひなれて、睦ましきものから、なさなきより、君と妾とは、親しく打交りて、春は隅田の花に手をつられ、夏は兩國の川邊に舟をうけなどして、學の窓もたゆまず倦まず、諸共に嬉し悲しもにてあり。さるに、かくも親しき君は、こたび海内のわざを修め終りて、外國の事廣く知り學び、遁れ名望を得給はむとのかどいで、あな別るゝは限りなく悲しく、筆にも言葉にも盡されねど、年をへて、君が錦を身に纏ひて、歸り來まさむ事をし思へば、今別るゝは、いと〳〵嬉しくも、亦望ましきことにこそ。

別るれど嬉しくもあるかから錦
　まとひてかへる君とし思へば

塙　いさむ子

そも〳〵、人の此世に在りては、うきもつらきも多かめれど、親しき人に別るゝばかり、名殘惜しきはいと少しや。今度、我うるはしき友がき藤子の君には、やんごとなきみ館に、嫁がせ給ふとよ。あな、いとめでたしとも、めでたき限になん。されば、今別に臨み、拙き身にも、心に思ふ一ふしを記して、馬の餞に參らするになん。あはれ、其許様とは、家の鄰なるによりて、幼きより共に睦びて、明暮行き通ひつゝ、心隔てなく、嬉みも悲みも共にして、姉君と事へまつり、妹といたはられて、面白き春秋のながめは更なり、たらちれ

の君へは、互に手助けなどして、樂しく月日を過したるに、今はと別るゝことの悲しさよ。妾は、君いにて後は、誰と共にか花を尋れ月をめでまし。誰か人とか、明暮親しく語らふを得べき。あはれ獨のみわびしく暮して昔を偲ぶべきか、思ひ廻せば、少さき胸は張り裂け、腸もちぎるゝ計なり。されど、よく〳〵思ひ返せば、さるまじうなん。かくはかなきことを聞え上ぐるは、我ながら恥との限よ。そも婦女の本分は、夫にかしつきて、舅姑に仕へ、弟妹をはぐゝみ、内政を掌る務なれば、其許様にも、是よりは、日頃の賢しき御心もて、たち給はゞみやかたはいよ〳〵富み貴く、榮え行き給ふらん。何卒まめに健けくおはしまさんこと、偏に希ひまつるになん。此後も、また互に消息を通じ給ひてよ、まづは、みいはひまで。あなかしこ。

中島まつ子

世に、生者必滅の例あり。會へば離るゝ理のたえてなくば、人をも、身をも、恨むまじ。されど月に雲、花に嵐、絶えまなく、周くる浮世ぞあぢきなき。君にはじめて逢ひし日より、何となく、なつかしうて、善きに、惡しきに、隔てなく天に昇らば翼鳥、地には連理の木となりて、長へに、何日までも、樂しく、浮世を送らんと、心は常に、天雲の晴るゝときなく、富士のねの、もえつゝとはに思へども、今となりては仇となり、戀ふる我身を振り捨てゝ、八重に重なる白雲の、あなたこなたに分るべき、際とぞなりぬる。得へくはぐしてゐて給へと心の中に思へども、君は學業を終へ給ひて、故郷におはする父母の膝下にかへる身なれば、せんすべもなし。されど、四とせの間、朝夕に、窓を共にし、學の道を勵みて或は、口に泡を飛ばして、男子のごとく、あけつらひける事もあれども、是とても、

互に、研く業にしあれば、いつまでも執着するにはあらず四季の眺めの折々は、暇だにあれば、手に手をとりて、そこかしこ、浮世の塵をはらひつゝ、樂しく過ぎけるを。明日よりは、誰と共にか談らはん、誰と共にか樂まん。哀れあへなき浮世かな。今日ある事は兼てより知りつれど、君のなさけに絆されて、いつか深くは交らひき、斯らざりせばいづくんぞ、今日の別に逢はんやと。いと忍ばれて袖の露干す時もなく思へども、身をし分ければ、日に見ねぬ、心を、君に添へ遣る。遠く山川隔つとも、心だに變らずば、又も逢ふ日もあらんと、其時ばかりをせめてもの、悲しき中の樂と、思ふものから、君が身を、いと、大切に守りつゝ、風の便りに音信れてよ。離るれば疎と、世の例の禮は、うち忘れ、至らぬ我身をいたはりて、今日に變らぬ、赤心を乖れ給へかし。いとし我君。

北原季子

あゝ妾が親愛なる友よ、君と妾とは、いとけなき小學の時よりの友にして、萬事心合もよく、むつびも一通ならねば、同じ友がきにもはやさるゝ程にはなりつ。さるからに、苦樂も共なれば、又學びの道まで、つゆたがふ事もなく、幸身にふりつもりて、今猶高き教の庭に師を共にせり、あな嬉し、つら〳〵思ひ見るに、いにし年、ふるさとを立ち出てし折しも、こひしきたらちねは袖を別ちつる其節に、ほどよく業をはげみ卒へ、錦をかざしてかへりなん。たのしみたまへの言の葉も、∴時の間にはや四と歳の昔とはなりぬ。其後は、學の庭にゆくもかへるも、手に手を取りつ取られつ、さながら、蝶々の花にはなれがたきが如きよと、人々にもわらはれしが、げにさる事にて、朝のねざめに、たらちねのこひしくて袂をしぼり、互にふるさとの夢まで見し事もあるに、やう〳〵馴るゝにつれては、氣を安めんとて、秋の月夜にふるさとを詠じ、すゝみては花のあしたのほゝゑみがちにはげみいはしみ、今わづかに一歳をへつるにあゝ天はましまさずや、神ましまさずや、げにはらからも及ぶまじき親しき友がきなる物を君には此程とみに重きいたづきに取つかれ、業を卒へてのかへるさを、樂みしかひもなく、手引の糸のいとながくむすびし物を、時の間にときかへしつゝ、今はしもふるさとをさして手ぐりゆくとは、あなかなし、思はざりけり、今こゝに雲井遥にへだつとは。あゝ今よりは、友はなし、否友は有てもはらからはなし、文の林は誰とたどらん、ことしの月は誰と眺めん。そも君が床につきにし其折より、ひるはひねもす夜もすがら枕邊近くはんべりて、友ら己を枕と思へば、こゝぞ日頃にまさりてと、古き文などに心を慰めみとりはをさ〳〵怠りなかりしかど、くすしのしるしさへなくて、日に病はまさるにぞ、父なる人は驚きまどひ、今日は都にのぼりきて、昨日は古郷へつれゆくと宣へば、さなきだに返す言の葉もあらざりしが、やう〳〵と、友よ、必ずよ、よわき心をなもち給ひそ、やがて古郷へかへりなば、父君母君の御みとりも厚く、又なにくれと心強くもなり給ひなば、やがて、病もいゆ給ひて、垣根のそとの田植のうたも、耳にや入り給ふらん。やがて鸚鵡のよういもとゝのへおきはべればげにも君との別れは、いとゞ悲しくさながら戰場に弓矢取られしも同じ事なれども、御身の爲なれば、又せんすべもあら波の心うき雲かきくらし、涙は磯に玉とくだけて、こぼるゝ外かはあらず、げに親しき友の別はかくもありなん、まして重きいたづきなれば一しほにかなし、あゝ友と別の悲しさよ。

福原菫子

同じ里に生れ、幾年月、同胞の如く親しみ睦みかはしゝに、こたび、もの學びの爲、鳥が鳴くあつまの空に、しかも四させいつさせてふ、長き日影、旅立行かせらるゝ友さ、別るゝばかり悲しきことはあらすかし。漿々千飛、いつしゝ遠く原頭まで、友をおくり來りぬ。いづくまでもさて、御なごりはつき申さじ。いざさくさくさ、つきそふ人にせきたてられ給ひて、今は友君も、詮方なく、用意の御車にめし玉ひぬ。くりかへす、古人の「白雲の八重に重なるをちにても思はん人に心隔つな」てふ歌さ共に、いさも惜しきたちさを分ちぬ。瞻望すれど、其かひなし。あゝ古歴の非婆さ、䟽傷の別れも、かくや疾風の如き車は、早や影きゐて、其なつかしきひゞきのなすのみ。ありしならんさ、學びし文のながばさへ、そゞろ思ひ起されて、一入むれふさがりくるぞぜひなき。

高砂き代子

げにや光陰矢の如しさ、まこさ思ひかへせば、君さ我れさ難波津を習ひ初めにし初めより、學びの窓を同じうしてはやこゝに八年、そがさし月、春は花、秋は紅葉の錦みも、共に物しつ、共に又夏さ冬さの物うさゝ、なぐさめられつ、なぐさめつ、學びの道をいそしみて、さしく〳〵に月の桂を折り〳〵て、なれむつひにし、日頃の御うつくしみも、思へば、いつかいつのまに、夢の心地に過ごしきて、此度こゝに業なし終り、今は別れん日かす指折るのみ。あはれ、又わきて此憂き五月雨の頃、唯さへもしめりがちなる我袖に、いかにしほたるゝべき。あなあはれ、君さ別れて、今日よりは、此の五月雨のつれ〴〵に誰さ物うさをかたらんや。誰に又蓬の葉草を問ふべきや、さこそさ思ひ忍ぶにも、今は唯かきくれ侍るばかりなり。さりながら、かくさてやむべき事にしあらねば、いさいさぎよく別れてん。茲に又、末筆ながら、君さ我さ、こゝに別れて、今日よりはいく里さほど〳〵へだつさも、かゝる御代にしあれば、あなうれし、遠くて近き風のたよりになり〳〵は文の音づれ、くれ〴〵もれき侍るになん。猶も思ひの言の葉、山山なれど、かくさもつきず、壷の石碑、先は御別れの御ことばまで、取も敢へずかくなん、あなかしこ。

思ほゐず君に別れて今日よりは
たれにかさはんことの葉の道

佐々有鄰子

いのちだに心にかなふものならば、なにかわかれのかなしからましとは、古今和歌集の離別歌なり。古人の說、うべなりけり。あなゆかしき心あひの友の、此度千里の波濤をしのぎて、臺灣島に船出すさ申越されつれば、海路なれど、馬のはなむけせんさ、三人四たりうちつどひ、月のむしろに露のなさけをくみかはして、春子姫が、こさならば君さまるべくにほはなんさ小琴かきならしうたび出づれば、秋子姫も、かへすは花のうきにやはあらぬさ、二絃琴をほがらかにひきならしつるも、今日の別の袂には、涙つゝみかねてなん。

本郷淺女

別れは逢ふのはじめさか、聞き侍れど、流石にうきは別れにぞありける。さりながら、何れのはての國ぶりにても、男は女にあふ事をす、女は男にあふ事をする習ひにて、日頃杖さも柱さも思ひ親しみ來りし我が友の、此度遠きしらぬひの筑紫のはての日向まで、めでたくも嫁がせ給ふさて、今日なん都をば旅立したまふなるさ聞く、別

惜しさを今更に繰事するは、凶事と思ひ侍れど、恰も片手のかけたる心地して、ながくにやむべくもあらずなん、されど思ひなほして。

相生の松のみどりの色そへて
いや榮ゐませ千代の友鶴

　　　　氣賀すみ子

事しげきまゝに、うちたゐみけしきもうかゞひ侍らざりしに、風の便にほのかにうけたまはり侍れば、君には、遠からず獻枕たつれんとてみちのくならぬ東の都へ上り給ふとかや。年頃むつみかはしたるなからひとて、なごりのいと〳〵惜しうは思ひ侍れど、また喜ばしう、そゞろ打笑まれてなむ。まいて、君には、いかにうれしう思すらんとなめげなれど己が心に引きくらべて、おしはかり參らす。総の豐軒の窓に、朝夕いそしみ給へや。ゆきにも匂ひたるにもまさる光は、やがて君が身にそひ侍らん。馬のはなむけにとて、使に持たせつる品まゐらす。納め給ひてよ。今宵一夜はやがてみたちへまう上りて語り明かさんの心なれば、くだ〳〵しきははぶきはべりぬ。

　あなかしこ。

　　　　山内蔦子

承れば、貴孃樣事、此度御修業のため、外つ國へ御留學の由、誠に結構の事と御羨み申上候、實に御貴孃樣とは、幼年の時より、同じ學びの窓に螢雪をあつめしに、今更御別れとは、いと御名殘をしう存上候、是迄は供に同郷ながら、一日御目にかゝらぬ時は、千秋の心地さへせられしに、殊更幾千里の彼地におはしては、其のかなしさいかならん思へば日に開け月に進む我帝國殊更内地雑居にも相成らば女子とは云へ大に外事の必要も來らん時節柄と存候、故、稍々學びの道を御研きなされて、一日も早く御歸國の上、廣く國家の公益を計られん事を祈り居候及ばずながら御留守中は、御家の事抔は、何かと御注意申すべく候間、御心置なく御留學あそばされ度候、尚氣候のかはれる土地の事故に、御身の程御大切に御養生あそばされ度、くれ〳〵も願上候、此は甚だ粗末の物ながら、御餞別として進上致し候間、御受納被下候はゞ本望と存候、何れ御出立の際は相伺ひ、ゆる〳〵承り度候得共、取敢へず右迄に候かしこ。

　　　　目黒佐喜子

諺に逢ふは別れの始めとや、今我身の上と成りぬるぞ悲しき。我友菜の君とは、如何なるすく世なりけむ、始めて逢ひ見し時より、いと能く心合ひて、交る日の深う成り行くまゝに、振分髪よりの友にも増して、親しみ睦びつ、そが宿もまた近ければ、學びやに出で入る時はいふに及はず、春の初花、秋の夜の月、見る毎に倶にせざるはなく、樂しきは倶に樂み、悲しきは倶に悲み、慰められつ慰めつ、唯姉とも妹ともたのみ、ふたりの外に友なしとまで思ひしものを、いかにせん、君は、こたびゆくりなくも故郷に歸らで叶はぬ身と成りぬ。されど、まだ、月の中はありけりと思ひ居たるに、はや其日數も盡きはてゝ、いよゝけふと成りぬ。我は見送りせんとて、しのゝめより君居ます叔父君が館におとなへば、はや旅裝ひの整ひて、出で迎へられし樣の、何となうしほれたる、いと傷はし。こたび、暇もあるならば、諸共に姿を寫眞に取らすべきを、其暇だになきぞ恨みなる。せめていぬる日給はるべく契かおきし君の寫眞、けふこそはと乞へば、見るにも堪へぬうつしゑを、君なればこそまゐらすなれと、即て取

り出て給ひしを、何心なう打返し見るに、水莖の跡美はしく、

今よりはわがうつしゑとあさゆふに
かたりてくらせなつかしのとも

さなきだに、けふの別れの悲しきに、かゝる言の葉打聞きては、まづ涙催はされて、胸もふたがりぬ。偖時もやうつると、諸共に出づる門の邊を、君はしば〳〵かへり見つ、打連れて、日毎入りにし此門を出るも、けふのみと成りけるよとて、打しめり、かたみにいふべき言の葉も、絶えたり。折しも、邊り近う寄する車に、ふたりひとし打ち乘りしが、遇くもがなと祈る車の、中々に速くおぼえて、はや停車場に着きぬ。札買ひて待つ間も、別れを惜む言の葉のみ、取り分け我は語らふうちにも、折々涙溢れて堪難きを、昔とかはり、今の世は、千里の旅も易きものを、さのみな心を傷め給ひそと、いふ君が聲まづうるみて、瞼のあたり紅に見えぬ、折から、あわたゞしき鈴の音に促されて、心ならずも立ち上り、別れを告ぐる辭もあとやさき、君は車に我は外に、あはひは扉に隔てられてぬ。斯くて、つれなき笛の音ひゞきて、はや車は動き初めぬ。さらばといふ聲もくもりて、見る〳〵遠くぞ成りにける。君が姿は、半窓より現はれて、手を振るが見えしも悲しかりしが、打なびく煙のうちに、漸く滊車の影消えて、遙にとよむ音のみを聞く頃、我に歸りつ、車にたすけられて、我宿に歸り着きしが、まづ彼の寫眞取り出し、三十一文字を繰りかへしつゝ、今更に君が言のは用ふる時は來にけりと、いとゞ悲しさいやまして、堪へ難ければ、かくは筆にもらしぬ。

中田豐子

いつまでも御側に侍りてわが行のゆき屆かざるをたゞして貰はなむと思ひ侍りつゝ、日々の業もいと面白く物し侍りつるに、ゆくりなく、此度の事おこりて別れ進らせむとは、かけても思はざりき、あなあはれかなしきかも。

つれなきは世のならひなれば、今は別れまつれごと、又も御側近く侍る時のなきにしもあらねば、ふかくな歎きそ、と我が心のこゝろにいさむれご、いつまでもといのりし心には、さることわりも辿られず、さしあたりまたたぐふへきものなき歎きにて侍れば、心もいたう亂れて、おぼゝしくもなむなり侍りぬる。さて後、見るもの聞くものにつけても、ふたゝびと御顔を拜み得ぬやうの心地のせちにせられ侍るには、袖さへいつしかに濕らゝを、我が日かげまつ末の露のはかなき身はのこりて、葉がくれの本のしづくのとこしなへに消えぬべうも覺え侍らざりし、いましの君はも、此度のゆくりなき事にて、つれなきためにいゆき給ひしこそ、をしとも、くやしとも、かなしとも、たとへていはむ方なけれ。されば、いましのまに〳〵、侍りもし得なむには、ゆきたうも侍れど、まゝならぬ浮世のならひには、ゐのこり給ふ方々と、力をあはせて、我が業をしいそしみつらむものと思ひ侍るも、今は中々に涙種とぞなれりける。まして、いとかしこき御こゝろに妾等を挑み給ひまた妾等もいごみ進らせて、春夏秋の折々に、此安宅の浦廻のけしきにあくがれ何くれの樂を共に物し侍りたるを、今更に思ひ出だされては、まぼろしにだに今一度は此樂に逢ふよしもがなと、現にも忘れ侍られば、夢のこときき心地めし侍りて、いよゝ心はおぼゝしくなりまさり來るをも、かくてはと心をはげまして、別れの時にありしやうなだにかきとゞめて、後の見形になしてんと、闇にくれたる此心にも、思ひよりつれど、手

のわなゝきふるふに、涙さへ水莖にながれそへは、ねもかきやらで侍るを、かうやうに月日を經こさならむには、如何にいみじき限りならん、

あはれ、かゝるくりこさをしるしもてゆけば、ゆくまにくに、胸ふさがりて、せきくる涙に袖さへそぼちて、いやましに悲しさ増し來なり、さては、何れの日にか、またも床しき御顏を拜みまつりて、我か心ののどかになりなむ「東路の道の果てなる常陸帶かことはかりも逢はんさそ思ふ」さ云へる古歌の心の、我身にしみ侍れは、松のみどりの色はかはるさも、君をしたはで忘れ侍ることのあるべしやは、あなあはれ、此心のあかん限りは、二たゝびも三度も君を拜み奉らんことのあらざらめやも。

岸田はつ子

逢ふは別るる初さは、いつの代よりの習にか、かりそめにあひてだに、別るゝは悲しきものを、まして二十年ばかりの年月、一日も離るましさ、はらからも及ばぬまで、むつびかはしし友の、今日しもわかれゆくことの、などかは悲しからざらん、などかは口をしからざらん。そも物心おぼえし程より、年さへ同じ遊びがたきとて、朝に夕に手たづさはりつゝ、やうく年たけて、文學びしも、同じ庭に通ひ、出つるも入るも共にしつ、げにかげさ形さの如くなりき。まして、たらちねの母に後れてよりは、杖さも柱さもたのみ、善きにつけあしきにつけ、語りのあひしを、今よりは誰をか力とせん、さはいへ、世には、親子兄弟だに、海山遠くへだつるものありさ聞くを、かく久しき年月、一日の如く交りしも、深き緣のありしにこそ、今はなけくまじさ、一たびは思返しても、なほ涙のみはふり落ちて、さしあたりての悲しさ、やらんかたなくなん。

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

題　…………………　…………………

住所
姓名

文書式

用紙は半紙二つ折の事。字體は詳明に記し、句讀點を施すべし。

題　……、……。……、……。……、……。……、……、……。

住所
姓名

總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて、個々に離て認むべし。

書式に違ひたるはすべて沒書とす。

○婦人は何人にても投稿隨意たるべし。

西村茂樹翁序　三輪田眞佐子著

女子處世論

定價金貳拾錢
郵税金四錢
郵券代用一割増

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化導の良績夙に女子教育社會に推重敬服せらるゝは敢て贅言を要せざるなり先き女史我が邦婦女子に其本分の在る所を示さんとして『女子の本分』の著あり本社之を世に公にするや再版三版忽ちに盡き四版の成るを告げたり世間高評の重き知るべきなり女史今又本書を著述し女子處世の心得を說く溫厚着實を旨とし其の理義を丁寧反覆す世の婦女子たる者坐右一日も缺くべからざるの良書たり閨窓雨軒之れを讀む諸嬢の清快知るべきなり。

杉谷正隆編

修身百首

全一冊

定價金貳拾錢
郵稅金四錢

この書は我が國古來の和歌の中につきて修身の訓誡となすべきもの一百首を擇びこれに深切なる義解を附して一讀人をしてそその本義を了得し而して大に發明する所あらしむるものあり我が國道德の標準は之を古人の言行にとりて是非善惡の歸を明にするを學者の要務とす淑女諸子乞ふこの篇を讀みて其の德器を養ひ給へかし

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　國光社
（電話番號一九四六）

工藤武重謹著

孝明天皇御遺徳

先帝御製（東久世伯染筆）挿入　全一冊定價金二十五錢　郵税金四錢

恭て按ずるに先朝　孝明天皇は曠古の明君なり不幸にして**事蹟**尚湮晦に屬し**聖徳**未だ外に露れず是れ頗る憾むべしと爲す此書は宸翰秘書及び先朝に奉仕せし雲客月卿諸官人の**實歴談**に依り以て汎く**逸事遺聞**を網羅したるものにして庶幾くは聖徳の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず

今此書の一班を示せむ先づ**御一代**の章を掲げ編年體を以て降誕より崩御に至るまでの事迹を示し**聰明**の章に於て　先皇の英明絶倫なるを概説し**風威**の章は御幼時の御言行を示し**慷慨**の上編は醜夷猖獗の事、其下編は皇權回復の事に痛く叡慮を惱されたる事蹟を叙し**孤憤**の章は獨り至尊をして社稷を憂へしむの質情を寫す**撫御**は識見卓出の實際を明にし**豁達**は言路洞開の聖徳を輝かし**忍耐**は襟裡荒廢供御菲薄にして時に或は十兩以下の御座用金に窮し給へる等の例證を示し**仁愛**は惻隱仁恕の御心甚だ厚かりしを明にす、而して前數章に配置する能はざりし逸事遺聞は總て之を**雜事**の一章に網羅し以て　先帝の聖徳を頌し奉る

發行所

東京京橋區築地二丁目廿一番地

國光社

国光社譯述

獨逸讀本抄譯

定價金拾八錢

獨逸は、教育の最も普及せる國なり、學問の國なり、實業の國なり、教育の主義は彼我國情を異にするも、教科書たる事實の撰擇、序述の文體等、其方法に屬する者に至りては、**玉を琢くの好資料**となすへき者多からんとて、熱心忠實なる教育者諸君は、獨逸讀本の譯述を促せし事、一再にして止まらず、本社も亦斯道の暢發を以て自ら任ずる者なり、豈他山の石たるを期せざらん、寸毫たも國家を裨補せん事、輾轉忘るゝ能はさる所憂勞敢て辞する所にあらず、されは、本書は、獨逸最近の讀本を渉獵し、**粹を拔き、精を撰び、**勉めて**原文の眞義を發揮**するを主として、抄譯したる者なり、教育者諸君之を得て**座右の好參考**に供すべく、學生諸君之を得て**朝夕の好良友**となすべく、彼の國**教育の實質を窺知するに於て、百千部の教育說、心理論に優れること萬々なり、**若夫れ文の流暢にして趣味多きや否哉、事實の新奇にして實際を遠さからざるや否哉、少年文書か如何に發達せるや否やは讀まん者よく知得べければ、略しつ、

發行所 東京京橋區築地二丁目二十一番地 **國光社**

稟　告

一本社出版物御購求の方は代價は必ず前金御拂込可被下候領金の順序に依り送本致可候

一郵便爲替にて御送金の節は拂渡局は東京新富町郵便取扱所にして受取人は東京々橋區築地二丁目國光社宛に御取組可被下候又通運會社早達便にて御送金の節は府下配達賃共必す御拂濟可被下候

一郵便切手を以て代金に換用せらるゝ時は一割増に申受候

一本社へ御問合せの節は必返信料御添附可被下候然らされは返信不仕候

一書籍雜誌御買上の方に對し別に代金受取證を差出し不申候間御注文品到着を以て入金の證と御認め被下度若領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附可被下候

一本社に御文通相成方は住處姓名等可成明瞭に御認め被下度候然らされは往々行違を生じ相互の不便免れ難く候

一未納税の來書は一切受取不申候

發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地　（電話番號本局八八）　國光社

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料添附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價	一冊	十錢
	六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢
	十二冊前金（半年分）	壹圓
	全國無遞送料	
廣告料	五號活字廿三字詰一行金二十錢	

明治三十一年五月十八日印刷
同　年五月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　川崎直衛

東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人　並木良雄

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所（電話番號本局八八）　國光社

（明治二十四年八月四日內務省許可）
（明治二十五年三月十八日遞信省認可）

時計價格概表

金側

●十八金無双裏三枚蓋廿一形龍頭卷價九十五圓ヨリ百七十圓迄●同中硝子價七十五圓ヨリ百二十圓迄●十四金無双中硝子價五十五圓ヨリ七十五圓迄●同片硝子價四十圓ヨリ六十圓迄●十八金無双裏三枚蓋七曜月日指シ月ノ滿欠十二月及引打付價二百九十圓ヨリ四百五十圓迄◉米國製十八金廿二形無双中蓋付龍頭卷價百二十圓ヨリ百五十圓迄●同十四金價五十五圓ヨリ九十五圓迄●同十六形價六十圓ヨリ八十五圓迄

銀側

●無双裏三枚蓋廿一形龍頭卷價二十三圓ヨリ七十五圓迄●同片硝子價十五圓ヨリ三十五圓迄●同片硝子裏三枚蓋二十圓ヨリ六十五圓迄●同片硝子[illegible]圓ヨリ卅三圓迄●同片硝子器械シリン價七圓ヨリ八圓五十錢迄●無双裏三枚蓋廿一形引打付價八十圓ヨリ二百五十圓迄●同片硝子價七十五圓ヨリ百七十五圓迄●同コロノカラフ付百七十五圓ヨリ二百五十四圓迄●同コロノメートル價六十圓ヨリ八十五圓迄◉米國製廿一形無双中蓋付龍頭卷價十八圓ヨリ三十五圓迄●同片硝子價十六圓ヨリ十七圓五十錢迄

金著側

●米國製廿一形無双中蓋付龍頭卷價二十三圓ヨリ五十五圓迄●同十六形十八圓ヨリ三十五圓迄

銀七寶

●端西國製銀七寶側裏三枚廿一形龍頭卷價廿圓ヨリ卅五圓迄●同四十圓ヨリ五十五圓迄

鐵側

●端西國製片硝子二十一形龍頭卷價五圓ヨリ八円迄●同九圓ヨリ十二圓迄

白銅側

●端西國製片硝子廿一形龍頭卷價三圓ヨリ七圓五十錢迄●米國製廿一形片硝子價六圓五十錢

（東京國光社印刷所印行）